

一麻雀飛翔伝一 哭きのTS竜

Fabulous

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

麻雀に命を懸ける一人の少女がいる。

和了れるはずの無い手を神業の如く和了るその少女の名は竜。

人呼んで、哭きの竜。

竜の麻雀に魅せられた者達が、彼女の前へと立ちはだかる。

目次

愛の章	99
復活の章	87
鹿児島島の章	60
大阪の章	37
長野の章	19
竜の章	1

## 竜の章

インターハイ 個人戦決勝戦

「……ロン」

無機質な少女の声が会場内に響くと彼女は右手で副露を中央にスーツと寄せ、パタリと手牌が倒される。

「二」

放銃してしまった少女がショックを受けているのは明らかであった。その証拠に彼女は打牌した「二」から未だ指が離れておらずわなと震え焦点の定まらぬ目で食い入るように凝視していた。

「けっ……決着ウ——!! なんとという劇的な終局でしょうか！」

本年度より初参加の甲斐学園代表 竜選手ツ 並みいる優勝候補を抑えて初出場の個人戦で初優勝だつ——！」

実況の興奮した絶叫とは対照的に全国大会で少女達の勇姿を応援していた観客たちも、競技場で実際に竜と卓を囲んでいた各校代表の三名達も言葉を失い戦慄していた。

「化け物……っ！」

勝者である竜の対面に位置する少女、宮永照の零した言葉に他の二名も沈黙でもって同意した。それほどまでに竜の麻雀は凄絶を極めたのだ。

「ここまで憑いて、負けたのはいつ以来でしょう」

もう一名、戒能良子は卓上に広がる光景に自らの力不足を嘆くとともにこれからの麻雀界に思いを馳せていた。

「純チャン……ドラ5」

手牌

〔一一一三①②③〕

ドラ表示牌（八九）

副露

〔横11111〕

〔横七八九〕

7翻40符の18000点。カンによるドラ4が乗らなければオーラス時にリードしていた宮永照を親でない竜が一手で逆転することは不可能であった。

そもそも個人戦は午前4戦午後6戦の計10戦であるので最終局では既に大勢が決まっていることが多い。しかも今年は既にプロ入りが確実視されている戒能良子に加え一年生ながらも団体戦・個人戦共に圧倒的な成績を出した白糸台高校所属の一年ルーキー宮永照、この両雄の戦いだと思われるだけにこの結果は予想外の一言に尽きた。

——竜——

優勝者を示す電光板にただ一文字だけ表示されたその名。本来、高校生の健全な教育を目指す全国大会で誰もが本名ではないと分かる名で堂々と出場しているだけでも異彩を放つが彼女の麻雀を知ればそんなことは些細な問題だと分かる。

予選の東東京大会で団体・個人共に大本命と言われていた臨海女子高校自慢の麻雀留学生達が手も足も出さず敗北。唯一食い下がれたのは当時無名の日本人学生ただ一人だけであった。

この時点で驚異の一言に尽きるが最も特筆すべきはその打ちスジであった。

彼女はポン・チー・カンといった鳴きを多用し数々の局で信じられない上がりを連発。その鳴きに呼応してか彼女の麻雀は他家も含めて配牌や自摸が確率的にあり得ない組み合わせ……必然すら感じさせる牌のめぐり合わせに人々は恐れ戦き、情景すら抱いた。

「今大会最大のダークホースとなった竜選手は……」

「大会前にこの世を去った亡き恩師の為に〜」

「鳴き麻雀での奇跡の逆転劇は日本中を熱狂の渦に〜」

「……」

興奮冷めやらぬ実況が続く中、竜は未だ放心状態の対戦者達を一瞥もすることなく席から立ち上がり出口へ向かった。対局室を出ると一斉に煌びやかなフラッシュが焚かれマスコミのカメラやマイクが竜へ突き付けられるが、彼女は煩わしそうに眼を細め胸ポケットに提げていたティアドロップのサングラスを掛け表情を見せぬまま試合会場を出て行った。

その時のことを、居合わせていた某麻雀雑誌の記者は後に語った。

「彼女は一切のコメントも感情も出さず記者達の前を通り過ぎました。百戦錬磨の記者達がそれでも食い下がろうとしましたが……今でもゾツとしますよ。」

彼女の体から……スーツと冷気のような白い煙が出てくるのが見えしました。それに当てられ記者達は全員が本当に凍りついてしまったように固まってましたよ。

今まで色んな人間を見てきましたが……いるんですね。ああゆう幽霊みたいな人間が。沢山の少女達が夢見る全国優勝の栄冠なんて興味ないって感じで彼女は授賞式にも参加せず消えちゃいました」

彼女はそこまで言うかと最後に笑いながらこう締め括った。

「でも正直に言ってホツとしましたよ。あんなのが近いちや、生きた心地がしませんからね」

既に光が落とされた試合会場に宮永照だけが佇んでいたと言う……。

彼女は決着した時のまま残されている卓を眺め続けていた。竜と麻雀を打った者達は時に精神を崩壊させる。現にこの年の全国大会で竜と対局した少女達の中にはその後二度と牌を握らなかつた者達も多くいた。

しかしその時の照の目は死んでもいなければ狂ってもいなかった。

「……必ずッ」

照は自分が切り竜が和了った（二）を見つめていた。

「……勝つッ」

照は静かに、しかし溶岩のように熱い決意を魂に刻んだ。二度と負けぬ己との誓いのように……！

「哭きの……竜……ッ！」

くくインターハイ会場前くく

「竜……感謝する。先代も草葉の陰で喜んでおるはずや」

甲斐学園二代目校長 石川いしかわたかし喬は深々と頭を下げた。その背後にズラリと並ぶ学園関係者も同様に頭を下げる。まるで極道の集会のような風景に群衆たちは遠巻きに恐る恐る眺めていた。

「誰が為などではない。己の為、己の足で来た」

素っ気ない竜の態度に不快になるところか石川はくつくつと鬼面を歪ませ万感の思いに至っていた。

「竜よ、わしが今何を考えているか分かるか？ 先代、甲斐正三かいしょうぞうがお前と最後に打ったあの夜の事や！ 昨日のことのように思い出す……懐かしいのお」

「……」

竜は暫し沈黙していた。

しかし石川は確かに見た。竜のサングラスの奥にある瞳が僅かに揺らぐのを……。

くく一年前 新宿歌舞伎町くく

東洋一とも謳われる街の路上を今、一人の少女が歩いていた。

夕刻を過ぎた繁華街にはホストや風俗嬢、一目でそのスジと分かる

人間達が欲望の眼をギラつかせ獲物を求め彷徨う道を少女は俯きただ歩く。

スカートを翻す女たちを他所に簡素なズボンを履き、対照的に血の色のような真っ赤に映えるシャツが衆目を惹いていた。長身に髪はベリーショートの七三分けならぬ九一分けと、華やかさ皆無であり遠目から見れば男と見間違うも者も多い。

やや陰気ながらも整った顔立ちとスリムな体型は美少女と評して間違いはないが、歓楽街の熱気に当てられた男も女達も全員が少女を一瞥すると幽霊か死人にでも出会ったかのように背中を縮ませ近づこうとはしなかった。

いつしか、雨が降り出したという……。

通行人は傘を取り出したり慌てて店の軒下へ駆け込むが、少女は髪や服が雨の雫に浸されても構うことなく歩き続けた。

「竜……随分探したぞ」

一人の男が竜と呼ばれた少女を呼び止める。

男は夜だというのにサングラスを掛け一目で高級と分かるスーツを纏ったいかにもな風体であった。

「竜よ、お望み通り己の足でやってきたぜ」

人間達の欲を呑み込めんと巨大な口を開けるネオン煌めく歌舞伎町一番街アーチ。その前で男と竜は僅か数メートルの距離で相対していた。

「分かった……話を聞こう」

竜と呼ばれた少女はすぐ脇にある薄暗い路地裏へと歩いて行く。



雨が降りしきる中、周りには若い女が好みそうなカフェやレストランがいくらでもあるにもかかわらず、あえて野ざらしを選ぶ竜に男は苦笑しながら懐から名刺を取り出した。

学校法人桜道会おうどうかい

私立甲斐学園 学園長

甲斐正三かいしょうぞう

——桜道会——

関東一円に勢力を誇る東日本最大の学校法人である。男、甲斐正三はその中で最大規模の学校である甲斐学園の学園長を務めていた。甲斐正三が竜と呼ばれる少女を知ったのはこれより少しばかり遡る。きつかけは巷に流れる単なる噂、よもやま話の類であった。

曰く、巷に恐ろしい女雀ゴロがいる。

曰く、そいつの麻雀は哭く度にドラが三つも四つも増えていく。

曰く、その哭きは天下一品。牌が閃光を放ち命すら喰い尽くす魔性の女。

曰く、その雀ゴロの名——哭なきの竜！

その話を聞いた甲斐の動きは電光石火の如くだったと言う。学校関係者に檄を飛ばし人海戦術で竜の居所を突き止めその元まで辿り着いたのが先月の事。

以降、常に甲斐は竜をマークし付け狙っていた。誤解無きよう説明すれば、御天道様に恥ずべき理由ではない。

「竜よ！ ようやく腰を据えてお前と話ができる。——感謝するぜ」

「感謝などいらん。——ただ、もう俺の後に付き纏う野良犬どもを外して欲しい。それだけだ」

甲斐正三は路地裏に設置されているゴミ箱の上に腰掛ける竜に傘を差す。しとどに濡れる少女の姿は倒錯的な色気を醸すが甲斐は別

の意味で興奮していた。

「単刀直入に言う。竜、学園うちに來い。わしらと一緒に天下、取ってみるか？」

「……分かるように話せ」

竜は教育者が目の前にいながら大胆にもポケットから取り出したタバコを口に咥え、同じくポケットに入っていたライターで着火しこれ見よがしに特大の煙を吐いた。

未成年喫煙の現場を目撃しながらも甲斐は竜を咎めはしない。今の彼は、そんな事に構うより重要な目的があるのだ。

「簡単な話じゃ。わしが教壇に立つとる学園に入学せい。ええ所じゃ、そしてその麻雀部に入れ。わしと一緒に全国に行こうや」

竜の甲斐を見つめる目が鋭くなる。少女の目つきではない。幾度となく地獄・死線・修羅場を潜ってきた者だけが放つ殺気にも近いソレ。どのような人生を歩めばこんな眼に成れるのか……竜の眼はそのような質問すら許さなかった。

「わしの学園は全校生徒合わせて二千人じゃ。その生徒達の人生がわしの肩に乗っちよる。重い肩じゃ」

「それで？」

「そのわしがこうしてわざわざお前さんとこまで出向いて頭を下げとる。そこらへん汲んでくれんか？　のう竜、これ以上わしをコケにするな」

「時間の無駄だ。帰らせてもらう」

煙草を地面に落とし靴裏で踏みつけた竜は甲斐の真横を通り過ぎ大通りに出ていくと、雨脚は勢いを増していく。

しかし、雨の中へ消えゆくその背中に怒声突き刺さる。

「竜！　おどれ本当に今のままでいいんか？　ケチな雀荘でチンケな雀ゴロや素人相手に小銭巻き上げるだけで満足なんか!?　ええ!!　そうなんか!!」

雨が痛いほど両者の頭上を叩きつけていたと言う……。

「竜、竜よ。全国じゃ。あそこにはお前の想像もつかん化け物共の巢窟じゃ。お前が求める本気の勝負がきつとそこにあるんじゃない！」

「……」

「わしかて助平心はある。お前は強い！ お前なら高校麻雀のてっぺんを取れる！ そしてそれを成し遂げるのはわしら桜道会や！ わしの渡世の親、桜田道造理事長の麻雀全国制覇の夢を叶えさせたいんじゃない〜！ 竜〜！」

それでも竜の歩みは止まらない。夜のネオン街に消えていく竜の背中に甲斐は最後の思いをぶつける。

「竜！ わしと勝負じゃ！ わしが勝ったら入学せい！ 負けたらわしの命でも何でも好きにせいやあ〜！」

これが哭きの竜と、勝負に挑む男達と女達の熱く哀しい物語の始まりでもあったのだ。

〜都内某所、ある雀荘にて〜

「竜よ。よく来てくれた。さあ！ このわし一世一代の大勝負じゃ！」

竜が甲斐から指定された雀荘は古びた建物の2階に居を構えていた。狭く暗い階段を登り年季の入ったドアノブを回すとこれまた時代を感じさせる店内がこじんまりとあった。

雀荘特有の喧騒は一切ない。

それもそのはずで中央の卓に座る者たちと竜を除いて雀荘には誰一人としていなかった。

「それにしても遅かったな。わしや待ちくたびれるかと思うたぞ？」

「時の刻みは……オレにはない」

雀卓に着いた竜に6つの視線が注がれる。甲斐もそうだが左右の男達も並大抵の打ち手ではないことが鬼気迫る眼光と気迫で語っていた。

「今夜の打ち手じゃ。右がこの雀荘の店主じゃ。左の厳ついのが部下の石川じゃ」

「甲斐学園副学園長の石川喬じゃ。お前さんが噂の哭きの竜か……！わしも一度打ってみたかったわ」

仁王のような巨軀に夜叉の如き貌に睨まれながらも竜はいつもの通りポケットから出した煙草を啜るが、それは石川の手によって叩き落とされた。

「竜！ 未成年の喫煙はやめい」

竜はさして怒りも見せず新たな煙草に手を伸ばす。逆に注意をあらさまに無視された石川の額に青筋が浮かぶ。

「おどれ竜！ わしらをコケにしとるんか!!」

「やめい石川。今日は構わん、吸わせたれ」

「しかしおやつさん！」

「どうせ竜は明日からわしらの教え子になるんじゃ……！ 今のうちに吸えるだけたつぷり吸うたらええ。じきに煙の味も忘れるくらい楽しい学校生活が始まるんじゃからのう……竜？」

「……ふん」

竜は今宵、甲斐正三のみを見ていた。

そして甲斐正三もまた、竜のみを見てい。

他の面子も今回が竜と甲斐の一騎打ちであり自分達は場を乱さぬ為の要員であることは理解していた。何より甲斐本人から竜を負けさせる為の差し込みやイカサマは絶対にするなど厳命を受けていた。「さあ竜。そろそろ始めようか……わしとお前の運命を懸けた麻雀をな」

「……」

竜が新たに吸った煙草の煙はこれからの勝負の行方を案じさせるかのように二人の間に立ち込めていた。

異様な空気の中で始まった半荘一回勝負の命を懸けた戦い。先に仕掛けたのは竜であった。

「ポン」

竜 副露

{横白白白}

四巡目でのポン。またいつもの鳴き麻雀での上がりかと思われたが甲斐の発声が割って入る。

「それポンじゃ」

甲斐 副露

{①①横①}

甲斐もまた竜の哭きに哭きで応え、瞬く間に東一局目は竜と甲斐の哭きが飛び交う空中戦となった。そして――

「……テンパイ」

竜 手牌

{北北北東}

副露

{9横99}

{横312}

{横白白白}

「おっと、わしもテンパイじゃ」

甲斐 手牌

{南南東東}

副露

{①①横①}

{横1111}

{一一横一}

互いに互いの当たり牌を抱えての聴牌。二人の対局を見てここまでは互角と考える石川に対し、甲斐の考えは違っていた。

――来とる……！ 今日のは竜はツキが無い！ わしじゃ……天がわしに微笑んどる！

竜の麻雀に恋焦がれ四六時中彼女の麻雀を見てきた甲斐は今夜の竜の運に陰りが出ていると確信していた。竜の幸運・豪運・天運とも言える力はこの程度ではないと甲斐自身が一番よく分かっているのだ。

甲斐の予感のまましく的中する。

「竜！ 2000 4000じゃ……！」

甲斐 手牌

{1122233} {1}

副露

{99横9}

{横978}

「竜よ！ 今日おめえは負ける！ (中) ホンイツじゃ〜！」

甲斐 手牌

{二三三四四} {二}

副露

{横九九九}

{横中中中}

その夜、甲斐正三は自身の言葉通り次々と有効牌を引き竜を圧倒した。まさに神も仏も彼の背中を押しているようであった。

己以外誰にも上がらせず甲斐の大幅リードで迎えた最終局。直取りなら跳満以上、自摸ならば三倍満以上が竜に残された僅かな逆転への道であった。

「ゴホッ……ゴホッ……竜。さ、最後の局じゃ」

圧倒的優位にも関わらず甲斐には微塵も油断はない。目の前の少女が一瞬でも油断すれば容赦なく喉笛を食い千切り心臓を貫く者だと知っているからである。

「おやっさん！ 血が……!! 汗もこないに……！」

対局の途中より甲斐の様子が見るからに悪化していたのは誰の目にも明らかだった。しかしそれをわざわざ指摘する竜でもなければ訳を話す甲斐でもない。二人にとってはあくまでも今夜の対局が全

て……！

それ以外は悉く『無』である。

だがここに、我慢できない男が絶叫する。

「竜うう！ 聞いてくれ！ 理事長が……甲斐のおやつさんが渡世の親と慕う桜田道造理事長が今、生死の境を彷徨つとるんじや！ 理事長は竜！ おめえに会いたがつとる！ 昔たつた一度麻雀をしたつていうおめえを呼んどるんじや！ おやつさんは、おやつさんは、なんとかその願いを叶えようとボロボロの体に鞭打つて——」

「止めんかあほんだらあ！」

「おやつさん！ しかし！」

口元から滴る血をハンカチで拭いながら甲斐は夜叉すら怖気づく眼光を放ち石川の言葉を封殺した。

「すまん竜、つまらん話を聞かせた。ええか石川、これはわしと竜の二人だけの勝負や。外野の事なんか一切関係ない。勝つか負けるか二つに一つ、それに命張つてるんよわしらはな……！」

文字通り血反吐を吐きながら配牌を揃える甲斐正三の姿に、竜は執念を見た。ただ勝つという一点の思いを——

オース 親 竜 ドラ表示牌 (⑤)

「チー」

竜 手牌

┌───┐  
│■■■■│  
└───┘

副露

(横⑦⑥⑧) 打 (⑨)

竜の哭きに周囲は怪訝な表情になる。ドラ鳴きとは言え鳴いてしまえば手は安くなり立直も裏ドラも失う。

鳴き清一色ドラ一の直撃ならば跳満の逆転だが竜の捨て牌には

〔④〕が一枚あり他家の河にも3枚見えていた。更に甲斐は自身の手牌に視線を落とす。

「ゴホッ……ゴホッ……！ う、ううう……！」

甲斐 手牌

〔4 5 ⑤ ⑤ ⑤ 九九〕

副露

〔中中横中〕

〔② ② 横 ②〕

——〔④ ⑤〕は全枯れ、〔②〕も三枚わしが鳴いとる。それにここでツモれば……う？う？！

ツモ 〔⑦〕

甲斐が引いたのは〔⑦〕。直前竜に哭かれた牌であった。甲斐はツモした〔⑦〕を一旦手牌に収め奥歯を噛み締める。当然上がれぬ為、どれかを切らなければならない。しかしそこが大きな関門であった。

——聴牌に受けるんなら当然〔⑦〕切りや。だが竜の考えが分からん。あいつは一体なにで待つとるんや……？

ギリギリと歯ぎしりの音が雀荘内に響いていた。

誰も甲斐の長考を急かしはしない。当然だ、この勝負は点棒や金のやり取りではない。二人の人間の全てが懸かった勝負なのだ。

竜もまた、煙草を燻らせながらただ静かに、しかし強烈に甲斐正三ただ一人を見つめていた。

——竜……こんな時でもわしを見るか！ 汗一つかかず、一切の震えも見せず、一言も弱音も見せん……！ お前はやはり麻雀の、いや！ 神様がもしいるんならそれはお前や！ お前がわしの勝利の女神じゃ！ 死神じゃあ！

意を決した甲斐は手牌へと手を伸ばす。

「竜うううううううう……！」



絶叫と共に吹き出る吐血。甲斐の凄絶な覚悟に彩られるように卓上に血が飛び散った。

「勝負じゃ——!?!」

その時、甲斐の視界は雀卓が自分へ向けて迫り上がってくるように見えた。刹那に湧いたその疑問は、胸を締め付ける激痛と石川達の怒声でようやくの納得を得る。

「おっ……おやつさん——!?! 救急車じゃ……! 早う呼ばんかいイイ……!」

「り、竜……! 竜よ……! ま、まだ終わつとらん……ぞ」

雀卓に頭から突つ伏した甲斐は、本人の気力はともかくもはや麻雀などできる有様ではなかった。手足には力は入らず呼吸する毎に大量の咯血が雀卓を染め上げ床へと滴り落ちていた。

「と、取れ……! わしの牌を取るんじゃ……勝負な……ん……じ……」

それもまた無理な願いであった。卓に突つ込んだ時点で甲斐は手牌の牌を掴もうとした段階でありその直後に倒れた為、どの牌を切ろうとしていたのかは甲斐のみぞ知る所だった。

「——終わったな」

騒然とする雀荘内で竜が静かに漏らした一言に石川が吠える。

「待てや竜! おやつさんは、おやつさんは肺の病気やったんや! 手術をしても五分と五分、おやつさんは頑として手術を拒んだ! 持って三か月……! その三か月に竜! お前に! お前に懸けたんや……! 何とか言ったらどうや!!」

「……」

竜は無言で甲斐正三を見た。最早口も利けぬ有様ながら必死の形相で己を見返す男の目を見た。

その時、竜の手牌

〔⑥⑥⑥⑥⑧⑧678六七八〕

副露

〔横⑦⑥⑧〕

ズバリ、竜は甲斐からのカン〔⑦〕を待っていた。断公九 三色同順 ドラ4の跳満直取り。逆転の手をしっかりと竜は張っていた。しかし、彼女はその手牌をゆつくりと卓に伏せ……席を立った。

「捨てた牌は表の世界。手の中の牌は裏の世界。己の裏は……己だけが知ればいい。その男は二千の人生を背負ってるんだろ？ 重い命、大事にしなよ。」

——待っている」

「竜……お前………」

石川の胸に、熱い血潮が沸き上がった。冷酷無比、勝負に対して絶対的なまでに真摯な竜が再戦を口にした——ように彼の目には見えなかった。

甲斐の行為は不測の事態による不可抗力とは言え厳密にルールに落として考えればチョンボである。この雀荘のルールでもチョンボは満貫払いで局はノーゲームとして仕切り直しである。

賭けているものが命であるが故、竜が勝負無効を切り出しても文句は言えない。しかし、竜は甲斐の勝負続行不可能としこの場で試合を中断した。

誰よりも勝負の中で生きている女が下した判断は、誰が為のものなのか？

それは竜のみが知っていた……。

竜はそのまま雀荘を出て眩いネオンの街へと歩き出した。

雨は未だ降りしきっていたと言う……。

ビル街の向こう側からサイレンの音が近づいていた。

——竜！ 竜！ わしの勝ちじゃ！ お前は今日からわしの生徒じゃ！ これからわしと一緒に麻雀じゃ〜！

その時、竜は確かに甲斐正三の声を聞いた。雀荘を一瞥した後、ポケットに入っていた愛用の煙草とライターを宙へ高く高く投げ捨てていた。

〜〜現在 インターハイ会場前〜

竜は石川の元を訪れた。甲斐の死を知らぬ彼女ではない。しかし、竜は、確かに、全国の舞台への切符を懸けた場に現れたのであった。

「のう、竜よ！ 懐かしいのう！ わしはこれからおやっさんの墓前に勝利報告じゃ。お前も来るか？」

「……懐かしくなどない。今もオレの中で——生きている」  
それだけ言い残すと竜は石川が用意した黒塗りのベンツを無視し歩き出した。

その歩みを止める者は誰もいない。少女は一人、喧騒冷めやらぬ人混みへ向かう。まるで己の存在そのものを消すかのように……。

だが、時の刻みはあまりにも無情に、残酷なまでに竜すらも巻き込む。

「哭きの竜！ 覚悟せえ〜！」

喧騒を掻き消す銃声が、紺碧の空に木霊した。

警察の取り調べにて、狙撃犯はこう供述したと言う。

「麻雀で負けた腹いせに撃った。3発撃って竜は倒れて動かなくなつた」

竜、狙撃される

突然の凶報に日本全国が震撼した。

インターハイ個人戦優勝者がその日のうちに狙撃されると言う大事件は、その凶悪性と話題性にも関わらず犯人逮捕の報だけが先行し、本人の容態は一切報じられなかった。

所属の甲斐学園も病氣療養の為に本人休学との発表しか行わず、その不気味な沈黙はネット上で竜は一命を取り止め都内病院に入院中だとか長野の雀荘で見ただとか、様々な風説を流布させた。

しかし一向に姿を現さぬ状況は次第に世間は事件を忘れいつもの日常へと戻っていった。

一部の者達を除いて……。

警察署にて供述調書にサインをした狙撃犯は、担当刑事におかしな質問をしたと言う。

「刑事さん、変なこと聞いてもいいですか？ 俺、本当に竜を殺したんですか？ いえ、竜を撃った事は認めます。あれは確かに哭きの竜でした。でもね……」

連日の厳しい取り調べも平然と受け答えをしていた太々しい男が初めて見せた動揺に担当刑事も目を丸くする。

「微笑ったんですよ？ 体に弾喰らって、さあトドメに頭だ……っつて瞬間にです。俺は、俺はあれほど恐ろしいと思ったことはありませんん」

両手で顔を覆った狙撃犯はこれから自分が語る言葉が自分でも信じられないかのように冷や汗を垂らしながら大きく喉を鳴らし、恐怖で震えた口元から供述した。

俺が銃を向けた時

あの小娘……

こっちの肝が縮むくらい……

倅せな笑みを……

浮かべていた

今、一つの時代が終結を告げようとしていた。

そしてそれは新たな戦いの幕開けを意味していた……！

## 長野の章

### 甲斐学園

「なに〜〜！ 竜が病室から消えただと〜〜!!」

甲斐学園学園長、石川喬の怒声が廊下まで突き抜けた。受話器越しに会話する部下は心臓が縮み上がる思いで自然と謝罪の形に背中が曲がっている。

『は、ハイ！ 今さつき着いて病室に向かったらもぬけの殻でして……。病院にも確認したんですけどまったく見当が付かないと……』  
「アホウ！ 早く探さんかい！ 竜は三発食らって絶対安静なんやぞ！」

怒りに任せて受話器を叩き切った石川の腸は煮えくり返るが同時に頭は不思議と冷静であった。先代甲斐正三が夢を託した竜を保護しきれなかった己に怒りは覚えども、彼女の身勝手とも言える行動に怒りはしなかった。むしろそれこそが竜だと石川は悲しいまでに理解していた。

「竜、今どこにいるんじゃない……。どこにお前は行くんじゃない……」

石川は知っていた。

竜は留まらない。

竜は安らぎなど求めない。

竜が求めるのは、戦いのみ。

己すら焼き尽くす、勝負の坩堝の惨禍のみ……。

「それ、ロンじゃー！ 緑一色！」

雀荘に似合わぬ快活な声が鳴る。

だがここは麻雀が競技として定着していない異なる世界ではない。老若男女が日々の楽しみとして集う雀荘がここ、長野県の某所に存在する雀荘である。

対面に役満を直撃させたメイド服の少女、染谷まこは得意げにガッツポーズを取り幼さを残す顔立ちとは裏腹の厳つい広島弁で嬉しさを顕にした。

「今日は調子がええ。何かええことがあるかもしれんな」

来年度より清澄高校に入学予定のまこは高校デビューに思いを馳せながら今日も実家の雀荘の手伝いをしながら客との麻雀に興じていた。

「おいおい、絶好調なのは良いが店員が客に役満直撃って商売としてどうよ？ てかカツ井おかわり」

北家に座って大きな井をカラにしながら雀荘のメニューに存在しないカツ井を出前に頼む非常識な女がいた。まこに対面から点棒が支払われるが女の点棒は役満手を上がった彼女よりも多く収支では一位であった。

「別にええじゃろ。それも込みでここのウリなんじゃから」

まこの言う通りこの雀荘は旧来の薄暗い雰囲気や煙草の煙やひりついた気配とは無縁であった。雀荘と言っても店内の設えは喫茶店のように華やかで若い女性客や子供も多かった。役満を振り込んだ客も悔しがりはしつつも特に不満もなく点棒を手渡しており純粹なゲームに興じているようだった。

局が終わりまこと女以外が席を立つと、女はサツと懐からキセルを取り出し慣れた手つきでマッチを擦り着火させた。立ち込める煙に眉を顰めながらまこは出前の為の電話を掛ける。

「中学生の前でよう吸えるのう」

「ここは喫煙席だろ。いる方が悪い」

「もう好きにせい。しっかし最近の客の打ち方はどうにかならんもんかのう?」

「打ち方?」

「悪いとは言わんが皆して鳴きまくりじゃ。それも速攻が目的じゃなく無理して大物手を狙い過ぎなんじゃ。さつきの客も萬子の清一色を狙ってるのが鳴きでもろ分かりじゃった」

「ああなるほど。確かに鳴きは立派な戦略だが基本は手牌や待ちがバレやすいし流れも悪くなる。多用する手じゃないな」

「それもこれもこの前の全国大会からじゃ……皆がみくんな哭きの竜のマネしとる」

そう言いながらまこは雀荘内を見渡す。

そこにはどこもかしこもポンだチーだカンだと鳴きを宣言する声で溢れていた。家業が賑わうことは嬉しいが麻雀を嗜む者としてはその顔に苦々しさもあった。

「プロリーグも似たようなもんさ。デジタル派はこぞつて彼女を否定してるがアナログ派はこぞとばかりに鳴いてるよ。ま、それで勝てれば私も苦労はしないけど」

「それだけ哭きの竜が凄かったしな。今どこにおるんじやろう」

「さあ? 死んだって噂もあるが、甲斐学園は休学の一点張りで何も発表しないし全国大会以降の公式大会にも一切彼女の名は無いな」

それまで裏の麻雀界にまことしやかにささやかれていた凄腕の雀ゴロ、哭きの竜の名は全国大会優勝にて日本中に知れ渡っていた。そしてその最中に起こった狙撃事件で彼女の名は既に伝説へと昇華していた。

「私も中継で決勝戦を見たが……久し振りに震えたよ。牌に愛された子は度々全国の舞台に現れるが、あんな衝撃は小鍛治健夜の闘牌を見た以来だったな」

小鍛治健夜。

麻雀プロ史上最強のは雀士は誰か?

そんな問いが投げかけられたならば必ず名前が挙がるのが彼女で



ある。

圧倒的と言う言葉すら生温い力で数々の伝説的記録を打ち立てた彼女と比較されている時点で、哭きの竜の異常性が伺い知れた。

「実業団やプロリーグ団体の幾つかはもう彼女に目を付けてるよ。噂じゃ海外チームもコンタクトを図ってるらしい。ま、本人に会えなきや皮算用だとは思うが……!!」

「麻雀界も忙しいのう……おっ、いらっしやいませー。お客さん、新顔か」

「……」

まこと女が会話に集中していると、一人の少女が既に卓へ座っていた。その少女はまこの対面に座り挨拶も無く顔を俯かせ卓上に散らばる牌の整理を無機質に行う。

続いて一般の客も空いていた席に着き自然と卓の始まりを意味した。

「新顔さん。ここのハウスルールは分かっとなるか？」

「……問題ない」

まこにはその少女の顔がよく見えなかった。否、見る事が出来なかった。彼女の本能とも言うべきものがその少女を直視することを忌避していたが、まこ自身はまだそれに気づいてはいなかった。

「ほいじゃ新顔さんのお手並み拝見といくか」

そうして、不穏な空気を孕みつつ局が始まった。

東一局 ドラ表示牌〔③〕

6巡目

まこ打 (中)

「——ポン」

少女 手牌

{  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
}

副露

〔中横中中〕 打 〔五〕

「なんじや、いきなり鳴きか」

「——ポン」

少女手牌

〔■●●●●●●●〕

副露

〔一横一一〕

〔中横中中〕 打 〔②〕

「なんじやなんじや。お客さんも哭き竜の真似か？」

立て続けに二副露となった少女に辟易した表情を浮かべるまこだがそれで手を抜く彼女でもない。雀荘店員でもある彼女の實力は同年代の中でも確かな物を持っていた。

少女 捨て牌

〔④④④⑦西五②〕

——六巡目で二鳴きか……〔中〕があるけえ何でも和了れるが最初と次に二連続の〔④〕ドラ切りから見て萬子の染め手かチャンタかいのう？

まこはしばしの思案の後、手牌の〔①〕に手を伸ばす。

——チャンタ狙いなら危ないが序盤で〔④〕を切つとるし筒子はしやーなーじやろ

まこ 打 〔①〕

「——カン」

少女手牌

〔■●●●●●●●〕 ドラ表示牌 〔③⑨〕

副露

〔①横①①①①〕

〔一横一一〕

〔中横中中〕 打 〔赤⑤〕

「なんじやと!?!」

少女のカンの宣言と共に新ドラ表示が捲られまこの計算が狂う。

大明槓によつて①四枚がそつくりドラ四、この時点で満貫確定。少女は新ドラ表示に浮足立つ面々を他所に嶺上牌をつまみ微かに口角を上げ……

「ツモ」

ゆつくりと嶺上牌を卓上に置き、和了を宣言した。

「はあ?」

少女の手牌が明かされるとまこのマナーもへつたくれもない叫びが雀荘に轟く。

少女手牌

②②②④④ ④④ ドラ表示牌 ③⑨

副露

横①①①①

横一一一

横中中中

「ドラ④の地獄待ちいゝ?! お客さんが捨てた牌やぞ!!」

まこは怒りにも近い驚愕を抱いた。

観察眼に自信のあるまこは少女の一挙手一投足を見ていた。特に手牌の動き、自摸牌を何処に引き入れどこから河に出すのか。牌を鳴いた時も然りである。

それゆえ少女が序盤に捨てた二枚のドラ④と手牌のドラ④が自摸牌でなく配牌時からの牌であることが分かると激しく動揺しながら目の前の少女について疑問をぶつけてしまった。

「最初つからドラ暗刻なのにそつから切つたつていうのか?! なのに待ちがフリテンのドラ④つて……っ! どがいなことじゃあ!!」  
しかし少女は一切動じない。ドギツイ広島弁を浴びせられようとも目を合わせること無く点棒を手にする。それに苛立つまこだったがその怒りが爆発するよりも先に一人の女の笑い声が卓に零れる。

「ククク……! 流石は全国の頂点に立った子だ。哭きの竜?」

「な! 哭きの竜じゃと?! どがいなことじゃ!」

女はそれまで見せていた無害な空気を一変させ寧猛な肉食獣の如

き笑みを表した。目の奥に光る欲望は獲物たる哭きの竜と呼ばれた少女の全身を舐めるように見ていた。彼女はただのカツ井好きの客ではなかったのだ。

藤田靖子、長野をホームとするプロ麻雀チームに所属する現役プロ雀士である。その実力はまくりの女王と評されプロの中でも一際強烈な存在感を持っている。

「撃たれたと聞いたが随分元気そうだな。あれからまだ数か月しか経ってないがとりあえず無事で何よりだ」

「……」

「だんまりか、噂通りクールだねえ。どうだい？ 一つ賭けをしないか。この半荘で私が勝ったらウチの団体に来てくれないかしら」

「藤田プロ!! そがいなきなりっ」

それは紛れもないプロ直々のスカウト。全国の麻雀少女達が夢見る展開に色めくまこだが当の誘われた本人は初めて顔を上げて靖子を見つめると小さく、それでいてハッキリと決意の籠った言葉を放った。

「オレは哭きの竜など知らぬ。オレはオレだ……」

「ハッ……!! 上等……!!」

そうして始まった哭きの竜? のプロ入りを賭けた勝負。機先を制したのは竜? であった。

「ロン」

「あう……っ」

竜? 手牌

{123中} {中}

副露

{横二二三}

{横①②③}

{発横発発}

先ほどの倍満直撃のショックからまだ立ち直っていないのかまこ

は再び竜？ に振り込んでしまう。見え見えの混全帯么九・三色に危険牌の字牌を打ってしまふ失態。まこ自身、ワナワナと震え頬を冷えた汗が伝っていた。

「ロ、ロン！ 混一色、5200や——っ！」

かと思えば次局、あつさりたまこに放銃し点差を縮められる。

「な、なんじゃ……さっきのはまぐれかいな」

ホツと胸を撫で下ろすまこだったが靖子が手牌を倒すと更に汗が噴出する。

「甘いな、まこ……！ マグレじゃないわ。見なさい」

靖子 手牌

「555777④④④東東東北」 待ち (北)

「す、四暗刻単騎待ち!?!」

「そして次の私の自摸牌は……ビンゴ！」

(北)

「竜が貴女に振り込まなきや私が上がってたわ。そうなれば親の役満自摸、竜はまだしも貴女はトビ終了で私の勝ちだった」

「け、結果論じゃ！ それじゃ何か!?! 藤田プロの言い草じゃこの女は役満手を読んでたばかりか山に積まれた牌が(北)だと知ってたっと言うのか——っ!?!」

「どうだかね、でも私も気になるわ。牌が透けて見える雀士がいるとかいないとか。哭きの竜さんもそうなのかしら?」

「……」

「またまただんまり。そんなんじや友達出来ないわよ? ま、いいわ。すぐにその化けの皮を剥がして泣きべそかかせてあげる」

その後も局は続いた。

もともとプロ雀士である靖子はコンスタントに手役を進めまこや一般客から安手ながらも直撃を取り点棒を積み上げていく。一方の竜? は身を潜めており不気味な沈黙を貫いた。

そして南三局 親 靖子 ドラ表示牌 (8)

「3位か……まだまだこっからじゃ」

染谷まこの最も特筆すべき雀士としての能力……それがこの眼で

ある。彼女は幼い頃から何百回・何千回・何万回と見てきた雀卓の光景を記憶していた。そして実際の局においてその膨大なビッグデータとも言える記憶を頼りに流れを掴んだり不利な状況を打破する術を持っていた。

まこは眼鏡を既に外していた。額の上に掛け卓上全体を俯瞰して見渡していた。しかし……

——み、見えん……！ 何なんじゃこの女は。今まで見てきた対局とどれも一致せん。のつぺらぼうじゃあ……顔も何もないのつぺらぼうじゃあ！

強気な言葉とは裏腹に彼女の精神は混乱していた。これまでどんな玄人や素人であつても全く何も見えないなんて事は無かつた。どんな策略も偶然も、彼女の脳裏には刻まれその局の流れと言うのが見えてくるはずなのだ。

それが無い。

それが見えない。

今のまこには目の前の少女が人間に見えなかつた。

——落ち着け、落ち着くんじゃ……！ 逆転は出来る。あと二局で何とか逆転を……

まこ 手牌

〔三赤五②⑦③東東南南西西北北〕

——き、キタ……！

それはまさに値千金の配牌だった。強烈に漂う役満の香りにまこはざわつく心を抑え平静を装った。

竜？ 第一打〔南〕

「ポンー」

まこ 副露

〔南横南南〕 打〔②〕

「お客さん……いきなり南切りとは随分強気じゃ——!?!」

竜? 第二打〔東〕

「ポ、ポン!」

まこ 副露

〔東横東東〕

〔南横南南〕 打〔⑦〕

「お、お客さん……なんぼ何でも舐めすぎじゃないか? そんなポンポンと字牌を——」

竜? 第三打〔北〕

「ポッ!?!」

「どうした、哭かナイのか?」

「う、うるさい! それもポンじゃ!」

まこ 副露

〔北横北北〕

〔東横東東〕

〔南横南南〕 打〔3〕

竜? 第四打〔西〕

「ポ……!?! ポ……ポポ!?!」

「哭くかい?」

「い……! 言われんでもするわ!

~~~~~つポンじゃい!」

まこ 手牌

〔赤五〕

副露

〔西横西西〕

〔北横北北〕

〔東横東東〕

〔南横南南〕 打〔三〕

「あんた……人を見る前に、己を見なよ」

「あん？ どがいなこ——」

「カン」

竜？ 副露

{三横三三三三} ドラ表示牌 {88}

「なにイイ!？」

「ツモ」

竜？ 手牌

{五五五1239④⑤⑥} {9} ドラ表示牌 {88}

副露

{三横三三三三}

「り、嶺上開花……ドラ4で、んな……馬鹿なっ」

まこが卓に沈むと同時に額の上に掛けられていた眼鏡がズルッと落ち、元の位置に戻っていた。大明槓の責任払いによる満貫出費によつて竜？ は1位に浮上し彼女は4位に転落したが、それ以上にその心はこの和了によつてポツキリと折れた。

「ククク……竜。まこを全く寄せ付けないなんてやるわね。でも私はプロだ、次でどう逆転するか今から楽しくてしようがないわ！」

瞬間的に膨張する靖子のオーラ。そのプレッシャーの奔流に今まで多くの雀士たちが飲み込まれていった。

だが……

「あんた——」

「え？」

「背中が煤けてるぜ」



南四局 オーラス 親竜？ ドラ表示牌〔⑤〕  
竜？ 打〔①〕

靖子 配牌

〔横赤5〕

〔一四赤五六七1234①②③④〕

——ククク！ 勝負手……私がまくりの女王と呼ばれる所以、教えてあげるわ！

赤ドラ二つにタンピン三色も狙える好形の配牌。立直や裏ドラを気にせずとも逆転は十分に可能であった。まことちがい靖子は勝負手が入っていることを察せられないよう誤魔化すこともなく、ギリりと笑いキセルを吸う。

靖子 打〔①〕

「チー」

「ん？」

竜？ 手牌

〔■■■■■■■■■■〕

副露

〔横①②③〕 打〔一〕

——なんだこいつは？ 一巡目に切った〔①〕を二巡目で鳴き？  
相変わらずセオリー無視か。

哭きの竜の打牌は全国大会でも解説者泣かせとして有名であった。牌効率やスジなど知らぬ存ぜぬとばかりに牌を打ち点棒を得る彼女は意味不明としか言いようがない。なんとか解説しようと四苦八苦するプロ雀士小鍛冶健夜を他所にアナウンサーの福与恒子などは早々に実況を放棄、ネット界限では神回として有名であった。

靖子 手牌

〔横三〕

〔赤5四赤五六七1234②③④〕 打〔一〕

「チー」

「んんっ?」

竜? 手牌

〔■■■■■■■■■■〕

副露

〔横一二三〕

〔横①②③〕

「クツ! 随分魅せるじゃない……やっぱりプロの才能があるわよ貴女。でもプロ相手にあんまり好き勝手やっていると……火傷するわよ!!」

竜? 打〔一〕

「……アチチチ!」

ポトリ、と手に持っていたキセルが靖子の太腿に落ち悲鳴が上がる。竜? の打牌に靖子のみならず他家も首を傾げその思惑を図りかねていた。

しかしそれを解明する前に靖子は遂に引き入れる。

靖子 手牌

〔横二〕

〔赤5三四赤五六七1234②③④〕 打〔一〕

「あ、貴女と打つと面白いように牌が集まってくるわ。意外と優しいのかしら? 二度あることは三度あるっていうけどまさか……」

竜? 手牌

〔■■■■■■■■23〕

「竜っ 貴女……!」

パタリ……と竜? の手牌から二牌が倒され――

竜？ 手牌

{■■■■■}

副露

{横123}

{横1二三}

{横①②③} 打{八}

三色同順完成。既に配牌で確定していた三色をわざわざ自分で崩して自分で鳴くと言う暴挙に靖子は混乱。まるで初心者 of 打ち回しだがこと彼女に限ってはそんな樂觀は死を招くと靖子はヒシヒシと卓に座ってから今まで感じていた。

それから数巡、靖子は無駄自摸が続いた。まるで竜？ の哭きにツキを喰われたかのように靖子の望む牌は顔を出さない。そればかりか――

靖子 手牌

{横⑨}

{二三四赤五六七234赤5②③④}

「……」

思わず、靖子の手が止まった。

竜？ の副露と捨て牌を見れば不安がぬるりと心に入り込む。

――彼女も自摸切りが続いているけど混全帯么九・三色を張っているならこの生牌{⑨}はかなり危険だわ。でもここで降りたら竜の速さを考えて逆転は恐らく不可能……。

打{⑨}

靖子は打った。危険を覚悟した一打。それは傍から見れば勇気ある一打だが彼女にとっては確信の一打である。

――次順の自摸牌は{5}よ。間違いない……私には分かる。これが通れば私の勝ち。

彼女には見えていた。全てではないが牌が見えるのだ。まくりの

女王と言われる所以は土壇場の勝負強さなどと言うあやふやな物ではない。彼女は凡人には決して到達できない領域にいる雀士の一人だったのだ。

「ねえ、聞かせてくれる？ 貴女は本当にあの哭きの竜なの？」

勝利を確信し余裕を見せる靖子の問いに竜？ は俯いていた顔をゆっくりと上げると同時に、手牌右端の三枚を倒した。

〔■⑨⑨⑨〕

「——カン」

「カン?!」

竜？ 手牌 ドラ表示牌〔⑤⑧〕

〔■〕

副露

〔横⑨⑨⑨⑨〕

〔横123〕

〔横一二三〕

〔横①②③〕

——私の自摸順がズラされた?! しかもドラ4!

「哭きの竜など、オレは知らぬ」

大明槓のカンドラもろ乗りと言う誰もが沸き立つ展開であっても彼女だけは表情一つ変わらない。誰もがその嶺上牌に固唾を飲み見守る中、やはり彼女は指先一つ微塵も震えずその牌を掴み、自らの頭上に高く高く掲げた。

「フ……！ フフフ……！ 痺れるわねえ！ 貴女がますます欲しくなってきたわ！」

恐怖とも歓喜とも取れる表情浮かべる靖子、同時にパツと離された竜？ の手からは嶺上牌がカランと無造作に卓上へと落とされた。

「——オレが欲しければ、あんたも命を懸けるんだな」

竜？ 手牌

〔九〕 〔九〕 ドラ表示牌 〔⑤⑧〕

副露

〔横⑨⑨⑨⑨〕

〔横123〕

〔横一二三〕

〔横①②③〕

しばしの沈黙……そしてズレ落ちそうになる眼鏡を抑えながら必死の形相で卓上を見つめるまこ。彼女は幽霊でも見るように席から飛び上がり竜？ に吠えた。

「な、ない！ あんたの打ちスジが何処にもない！ こんなんありえん!!」

それも無理からぬことだった。竜？ は配牌時から一切手牌に自摸牌を入れずに自摸切っていた。つまり配牌時の手牌は

〔一二三八九123①②③⑨⑨⑨〕

この形になる。

ダブル立直、自摸れば親倍満の奇跡に近い配牌を崩してまで上がった役が結局同じ親倍満。しかも三副露の時点で〔九〕単騎待ちで張っていたにも関わらず異端の大明槓による嶺上開花。

まるで彼女のみが卓上の全ての牌を操っているかのような無謀・暴挙・狂気などと言う言葉では到底言い表せない意味不明の感性。まこの脳内データベースは既にショート。目の前のバグとも言うべき存在に客と店員の関係も忘れたただただ恐怖していた。

「終わったな……」

「待って」

まこの狂騒などどこ吹く風、竜？ は胸ポケットにしまわれていたサングラスを掛け脇目も振らず雀荘の出口へと向かうがそこに靖子の声が掛かる。

「二年後……！ プロ・アマ合同の親善試合があるわ。そこに来れば貴女を負かす雀士がいるかもしれない」

その言葉に竜？ は出口の扉に手を掛けつつ立ち止まる。

「竜、貴女ひよつとして記憶が無いんじゃないの？ 撃たれたシヨツ

クで自分が誰か分からないんじゃない?! 違う?!」

彼女は答えない。否定も肯定もしないその背中に靖子は畳みかけるように核心を突く。

「でも貴女は麻雀をしている。記憶を失っても貴女の魂は飢えてる！  
求めている！ 勝利に、戦いに、身を焦がす真剣勝負に!!」

その言葉を受けて彼女はようやく振り返る。靖子はその横顔に、サングラスの向こう側に僅かに透ける眼に射抜かれた。

「オレは過去など知らぬ、未来など興味も無い。オレはオレ、他人は他人。オレは——」

紡がれる言葉と視線は靖子の背中と下腹部にゾクゾクと走る電流と興奮に変換され、彼女は次に何を言うのかも忘れていた。

「——竜!!」

その時、靖子の何かが決壊した。

「あなたの言葉……覚えておこう」

竜の姿が完全に見えなくなると靖子はへたりとその場に座り込んだ。一回りも年下のアマチュア学生に負けたショックからではない。

「ふふっ ふふふ……! 哭きの竜……哭きの竜うう……!」

靖子は感動していた。得も言われぬ激情に身を任せていた。

「はあああ……何て、何ていい女なのかしら……! 食べちゃいたいわ……!」

また一人、竜の魔性に魅入られた女がいた。

る。しかしそれは、この先に続く犠牲者の一人に過ぎなかったのである。

## 大阪の章

その日、高体連本部では竜の賭け麻雀についての会議が行われていた。競技麻雀の専門部中心に集められた役員の他に数名の弁護士と書記が巨大な会議室に置かれた円卓に着席し会議の始まる時刻を待っていた。

「甲斐学園の方はまだですか？」

中央に座る年配の男性が口を開き、それに隣席の初老の女性が答えた。

「もう控室に到着していると思いますが……確認してみます議長」

今回の会議に足りない面子がまだいた。当事者である竜が所属する甲斐学園である。

「しかし、まあ処分は免れんでしょうな」

「無期限の公式大会の出場停止が妥当ですかな」

「ここは厳しく優勝取り消しも付けるべきでは？」

まだ会議が始まっていないが各委員たちは思い思いに喋り出す。それだけ聞いても竜に温情ある措置を述べる委員は一人もいない。

今回の議題、つまりは竜の過去に行っていた賭麻雀についての処分であった。

ことの発端はある週刊誌のスクープ報道であった。

あの凶弾に倒れた悲運のヒロイン、哭きの竜は過去に違法賭博麻雀三昧だった!!

どこから嗅ぎつけられたのか竜の過去についての週刊誌報道により、彼女の選手キャリアが脅かされる事態となっていたのだ。報道を知った甲斐学園側は説明に苦慮した。何せ竜の過去は全くの謎であり石川であってもその殆どを知る由もなかった。更に厄介なのは報道がほぼ事実であることだった。竜が甲斐学園に入学してからは驚くことにきちんと学生をしていたが甲斐正三や石川たちと出会



う以前は都内近辺のイリーガルな雀荘やホテル麻雀などでの勝ち分で生活をしていたようであり事実無根と突っぱねることは不可能だった。

肝心の竜が行方不明であるため本人からの釈明もできない状況で事態はどんどん悪化の一途をたどり、遂に高体連の査問会が開かれる運びとなった。

そもそも、麻雀と賭博の親和性は言うまでもないことだが麻雀がプロスポーツとして広く世間に認知され愛されるよう血道を上げてきた彼らに彼女らにとって今回の竜の行動は許しがたい暴挙である。高校在学中の違法行為ではないものの麻雀賭博は現代では御法度。ジューズ一本、一円たりと賭けてはいけなのが常識である。

それに彼らは警察ではない。公益財団法人として独自性をもって処分を決める事が出来る。つまり法理論ではなく道徳や倫理でもって処分を下せるのだ。

「皆さんその辺で。続きは甲斐学園の代表が来られるまで待ちましよう」

議長の制止で公然とされていた竜の処分話はヒソヒソと鳴りを潜めたが会議の方向性事態に変わりはない。

まさに、竜の選手生命は風前の灯火であった。

——高体連本部前——

「やはりお一人で行かれるので？」

「ああ。お前はここで待つとれ」

本部前の公道に止められた黒塗りの外車から出てきた男、甲斐学園学园长 石川喬いしかわたくしである。

石川は今日、ある思惑を持ってこの地へと赴いた。目的は勿論、竜の助命歎願であるがその為には超えるべき問題が立ちふさがっていた。

「しかしなんでまた在学前の賭け麻雀が問題に上がったんでっしゃろ？ 少し臭います」

「言われんでも分かつとる。どこぞの鼠どもがこのことを大事にしよ  
うと動いちよる。だが思い通りにはさせん」

「ご武運を祈つとります、学長」

——高体連本部——

「甲斐学園の石川喬じゃ」

到着を告げると受付嬢は少し怪訝な表情を浮かべたのが気になつた石川だが示された控室の場所へ歩を進めた。その場所に着くと石川は漸く意味が分かり疑問は笑みに変わる。

「川地んとこのか……ご苦労だったな。そのドア、開けて貰おうか」

「お疲れ様です石川学長。申し訳ありませんがここは川地が仕切っており  
ます。お引き取りを」

控室前には自分と同じ桜道会のバッジを胸に付けた若衆が数名門番の  
ように立ち塞がり、石川の歩みを阻んでいた。

「竜はわしんとこの生徒じゃ。その竜の事で開かれた会議に出席する  
のはこのわし以外おらんじやろうが！」

「いえ、しかし、川地や室田が通すなど……」

「サンピン!! 能書きはええ……早うここを通せや!!」

猛獣の咆哮もかくやと呼ぶべき怒声が本部内に轟き男達も気圧さ  
れ体を強張らせた。その隙を突き石川は強引に扉をこじ開け中へと  
押し入った。

そこには見慣れた小憎らしい顔が二つ、石川を出迎える。

「これは川地の親分。お久しぶりで……」

かわちこういち  
川地幸一

石川と同じく桜道会に所属し自身も教育機関の長である男がそこ  
にいた。先代甲斐正三の代より何かと張り合ってきた目の上のたん  
瘤としばしの睨み合いがなされると横に控える側近の室田が石川に  
突っかかる。

「石川よう、おめえ最近いきがり過ぎじゃねえか？ 今回の代表は川  
地校長が出席することになつとんのじゃ」

「それはそれはご苦労なこつて。けど今回スジ違いしとるんはそちらでっせー!」

吠える石川に今度は川地が口を開いた。

「石川よ。おめえの気持ちも分かるがことは甲斐学園だけですまん。法人全体の沽券に関わること……これも桜道会の為だ。まあ、分かってくれや」

「ほう……興味本位ですが川地校長は竜をなんとするおつもりで?」

「わしは何もせんよ。肅々と処分を受け入れるさ。仕方あるまい、これだけ世間を騒がした生徒が麻雀賭博なんぞ教育者として見過ごすことはできん。お前もそうだろう? のう……石川ア」

——どぐされ鼠どもめッ!

ぎり……と、目の前の男達の鼻つ柱を殴り飛ばしてやりたい衝動を奥歯で噛み殺しつつ石川は冷静を装った。そんな姿を嘲るような口調で川地は続ける。

「お前は確かに桜道会の理事の一人だがだがまだまだ新米。まあ先代と理事長が急死しちまったからしうがねえがこれも社会勉強だ。じつくりじいーつくりと下地を積むんだな」

「分かつとりま、よおく分かつとりま。せやけどそがいな道理よりわしは大事にしたいもんがあるんです」

「なに?」

「竜は……竜は先代、甲斐正三が惚れ込んだ女、そしてわしらの生徒です。生徒の将来を守る為ならわしは喜んで道理を踏みつけて行きますよつて。それに、もし竜を見捨てるようなマネなんぞしたらわしはあの世で先代に申し訳が立たんです……!」

次の瞬間、石川の行動に川地と室田は驚愕する。

「い……い……石川あ……っ!」

石川は懐から取り出した短刀を鞘から抜き放ちその白刃を川地達ではなくなんと己の喉元に突き付けたのだ!

「わしも竜に惚れ込んだ一人……その竜の尻を拭くんはわしの役目や！」

川地達は石川の覚悟を見誤っていた。彼らにとっては単なる主導権争いの為の一手であったが石川喬にとってそれは全く別格の意味を持つ。

竜を導く——などと石川は思い上がってはいない。喉元に喰い込む切っ先を感じつつ石川はかつて甲斐正三が語った言葉が頭を過っていた。

——石川よ、竜を子供だと侮るな。アイツは立派に己の足で立つてる。どんなケチな相手だろうと己の命を懸けて戦っているから眩しいんや！ 己で輝いとる存在じゃ。わしらはその光に誘われた虫みたいなもんじゃて。それでも虫は虫なりに楽しくアイツと遊んでやれや。本気の遊びが好きな所だけは、子供らしいやつなんじゃ……！

己が慕う男がある日を境に年端もいかぬ小娘に熱を上げた際には気でもおかしくなったのかと不安を覚えた。

しかし竜に出会い、その麻雀を、その生き様を目の当たりにし、甲斐正三の思いがよくよく分かった。

——竜よ、お前はいったいどこに行く？ まさか一生その日暮らして訳にはいかんやろ。プロか？ それとも他にアテがあるんか？

同時に石川は学校にて入学間もない竜に疑問を投げかけた時のことも思い出していた。彼女は冷たくも強い意志の籠った目を向けるとそれだけで石川の心臓は鼓動を増す。

「……己の行き先など興味もない。他人に縋るほど哀れでもない」

およそ十代の少女が述べる言葉とは思えぬ達観した人生観に石川は沈黙する他なかった。気づけば石川もまた、程なく竜の魔性に魅入られていたのだ。

「ク……ッ　クックック……！　竜う……！！」

生きるか死ぬかの状況で石川は何故だか無性に竜が恋しくなりその名が零れた。

そんな自分が滑稽でしよすがなかった。

その後、石川喬は甲斐学園代表として会議に出席した。

会議は大方の予想を裏切り石川喬は竜を全面擁護し紛糾を極めたという……。後日、会議に参加したあるメンバーはその時の状況をこう述懐する。

石川喬、夜叉の如し。

高体連に慥然と立ちほだかる。

一昼夜、会議の場で微動だにせず竜に対する処分撤回を求めたという。

石川は分かっていた。

己の喉が枯れ、体を支える足が折れ、精魂が尽き果てたその時、己の命を絶つ……。そんな悲壮な決意で形ある処分を求める委員たちの追及を真つ向から受け止めた。

そして……

「皆さん、そろそろ何らかの結論を出したいと思うのですがよろしいですか」

議長の提案に会議の面々は力なく頷いた。

「待ってください議長。わしはまだまだ言いたい事が山ほどありますよつて、ご臨席の方々には申し訳ありませんでしようが」

石川の空元気に議長は呆れる他なかった。予想を遥かに超える長丁場に着席している委員たちは皆げんなりと萎れており議長自身も身体の節々にじんわりとした疼痛を感じていた。

しかしこの場で最も疲労していたのは石川である。大粒の汗を額から垂らしスーツ越しの背中も汗染みでぐっしよりと濡れていたのだ。無理も無い、会議が開始してから一度も休憩せずその体格にあった虎のような大きな声で竜の弁護を続けていたからだ。

「貴方の熱意はもう十分に分かりました。ええ十分に」

「ほう、せやら竜のこと、どう収める所存で……!?」

「ごうしましょう。貴高には嚴重注意と再発防止の徹底。竜君には今年度中の公式戦出場停止というのは？」

この言葉を石川は待っていた。

何よりも石川が避けたかったのは竜が来年度の全国大会に出場できない事である。栄光など竜本人は気にも留めないが甲斐正三との約束、三年間のうちに全国大会三連覇……この盟約が履行できないのはまずかった。

その為ならば自分はどんな泥も被る覚悟だったが遂に石川は賭けに勝ったのだ。

「分かりました。温情ある措置、感謝します」

注意など竜が聞く訳もなく、聞いたところで考えを改める人間性など竜は持ち合わせていない。今年度の公式戦出場停止も他の一般学生にとつてはかなりのマイナスだがそもそも竜は全国大会以外出場

する気はない。今年度は既に優勝を果たしたこともありこの決定は、  
処分の体をなしているものの竜にとって実害は皆無であった。

——竜よ、こつちはこつちで勝手にやつとるわ。お前も何処をほつ  
つき歩いているか知らんが早う帰つてこい。わしもお前と久しぶりに  
麻雀がしたいわ……！

高体連本部より出た石川を迎えた車は首都高速を通っていた。厳  
しい残暑も次第に鳴りを潜め肌寒い風が吹き始める季節を窓越しか  
ら感じながら彼は未だ行方知れずの少女に思いを馳せた。

——南大阪 某所 とある雀荘——

愛宕洋榎あたごひろえと言う麻雀少女がいた。

インターミドルで結果を出し特待生として鳴り物入りで関西の強  
豪、姫松高校に入学した実力者。その打牌は基本に忠実なれど時に野  
生の勘とも言える危機察知能力を備えたオールラウンダー。単純に  
して隙のない闘牌は一年生にして既に麻雀部のエースを任されてい  
るほどの傑物。

南大阪に愛宕洋榎あり。

「オツシヤ立直やー！」

バシツと卓上に立直宣言牌を叩きつける少女がいた。五巡目にし  
てのフライング気味立直に他家は警戒感を顕にして回し打ちに徹す  
るが彼女はいつものペースでまくし立てる。

「さあこいこい！ 一発ツモいくでえくくキタ！ ツモや！」

自分でも驚いたのか声が上擦りながらツモ牌と手牌を晒す洋榎。

一発ツモに顔を苦くする他家だが晒された手牌に度肝を抜かれた。

「立直一発ツモ七対子ドラドラの跳満！ これでウチの逆転トップで終了や！」

ツモアガリで逆転するには跳満以上が求められたオーラスで七対子ドラドラでの立直。一発ツモが付かなければ逆転できない状況での賭けに僅か5巡で判断する度胸とセンス。

この時点で並の麻雀高校生には決して到達できない領域に彼女は立っていた。

「ふっふう〜ん♪ これでこの雀荘でも敵無しやなく。もうこれは南大阪最強はこの愛宕洋榎と言っても過言ではないなあ〜」

そして調子と言う見えない台にも立っていたのだ。

点棒精算が終わると消沈した面持ちで卓を離れる客たちの中で一人の中年の男が洋榎に話しかけた。

「お嬢ちゃん随分強いなあ。せやけどこの雀荘で最強名乗るんやったらわしら程度を倒したぐらいじゃいかんわな」

「なんやおっちゃん、負け惜しみかい」

「そないな下らんことするか。いるんや、この雀荘で一番ごっついやつがな」

その一言に彼女のプライドが刺激されたのは言うまでもなかった。

「ほならそいつ連れてこいや！ ウチがボッコボコにしてやるさかい！」

男はニヤリと齒のすけた口を歪ませ嗤う。

「そりゃ無理や。そいつはたまにしかこんねん。いつも気いついたら卓に座ってるか入り口に突っ立って……あっ」

その時、男は話の途中で声を上げ固まった。洋榎は男の視線の先を目で追うと、そこには一人の少女が立っていた。

一瞥、雀荘内の空気を確認するとその少女はゆらりと洋榎の卓へと歩を進めた。

「あ、アイツや。アイツがその最強や！」

動揺する男を他所に洋榎の喉はゴクリと大きく鳴った。



「な、なんや。哭きの竜やないかいっ」

ワインレッドのシャツに無骨なズボンを身に纏わせこちらに近づいてくる女を洋榎はただ直視していた。

「嬢ちゃんも知つとんたんか。そや、アイツが哭きの竜や」

既に洋榎から見て上家の卓へと着席していた竜は感情の読み取れぬ表情を張り付かせたまま一切微動だにせず……。

「お初に、ウチは愛宕洋榎。アンタの噂は臍氣によう聞いとるわ」

「……」

洋榎の絡みにも眼球だけを動かし目を向けるが、同年代の女子高生らしい華やかな会話は期待できない。

ただ、ただ、痛いだけの沈黙が続く……。

「雀聖、人鬼、神域、昔から巷で流れるそないなホラ話は聞き飽きたわ。アンタの無敵神話、今日でウチが引つ剥がしちやるよって」

愛宕洋榎の宣戦布告、南大阪では敵無しと言われる少女と全国最強の女二人の対決に観衆は固唾を呑んで見守っていた。

その時、初めて竜の口角は僅かに引き上がり乾いた息が漏れ出た。

「——ふっ」

一息、

ほんの一息が零れ出ただけで洋榎の心臓は飛び跳ねた。

「はん！　噂通り辛気臭いやつちやな。そんなんじやツキが逃げてくでっ」

勝負への意気込みか、それとも己の動揺を隠す為か語気が増す。しかし竜は陰鬱な表情から冷たい空気が漏れ出るのみ。

「ま、ええわ。ウチはアンタと対局できればそれでええんや。ここに来たってことは打つんやる？」

「……半荘一回勝負で願いたい」

「決まりやな。おいオツチャン、ちゅーわけやから席どいてえな」

東一局 親 下家 ドラ表示牌 (8)

竜と愛宕洋榎の直接対局、雀荘内はこの対決に卓の周りへ我先と集まりだす。ギャラリーを背負いながらも委縮するどころか力増す洋榎は勝負の機先を早速制す。

「ツモや！」

洋榎手牌

(一一一444789⑨北北北) (9)

初手からツモ和了りの三暗刻ドラドラの満貫。これで勢いに乗った次局――

「カンといくでえ。嶺上は……ツモ！ 嶺上開花や！」

洋榎手牌

(三四五57⑤⑤⑤西西) (6)

副露

(■七七■)

カンチャン待ちの薄い上がり目を嶺上開花で掴み取る剛腕によって東二局も順当に和了。

「どやー！ 嶺上開花で和了れんのはアンタだけやないでえ！」

洋榎は点棒を積み上げるも、対する竜はただ黙し伏していた。

そして流れるようなテンポで始まった東三局、親は竜。

ここまで二連続和了の彼女を恐れ他家は生牌を絞りに行く消極的打ち回しに徹していた。

徐々に熱を帯びる洋榎だがその思考はクリア、冷静に卓上を俯瞰する。

「けっ、しよっぱいなあ」

更なる勢いを付けたい所だが今局はその流れに陰りが出ていた。

十巡目にして誰も上がらず副露も無し。いつそ不気味なまでの静寂が卓を支配していた。その理由は……

竜 捨て牌

{ 8 8 ② ③ 四七 }

{ 五五 ⑤ ④ }

「……」

「……」

「……」

洋榎含め他家の脳裏には一つの役が浮かんでいた。

一九字牌全てを使用した役満、国士無双。その気配が漂う。

「竜さんよ。国士狙いか？ 勘弁してくれや」

「せやせや。ワシらあんたが来る前にその嬢ちゃんにしこたまシバかれたんやで。少しは点棒恵んでえな」

そう言いながらも他家二人は早々にベタオリ。だが洋榎は反対に攻めの姿勢を崩さず終盤になっても一九字牌をツモ切る強気を見せ観衆を驚かせた。

「あ、あほけえ！ あの竜の捨て牌にそないな牌を切るなんてっ」

「洋榎ちゃんそりやないでえ。通ったんはマグレや、マグレ！」

「うっさいわアホ！ 黙って見とれや！」

洋榎の強気は流局まで続き最後の打牌も場に一枚も見えていない超危険牌の〔西〕。打牌の瞬間に他家やギャラリーからは息を飲む声が聞こえたが竜からのロンの声は上がらなかった。

「……聴牌」

竜 手牌

{ 九九 1 9 ① ⑨ 東南西北白發中 }

大方の予想通り国士聴牌の手牌。それを見てホッと胸をなでおろす他家を尻目に洋榎は嗤う。

「ハッ——ウチも聴牌や」

洋榎 手牌

〔一一一一二三三四234②③④〕

「りゅつ 竜の和了り牌を四枚とも……！」

「な、なんやこれ？ 234のタンピン三色も狙えとつたのにこれじゃクソ手、しかも〔四〕のツモしか上がりが無いやないけえ！」

洋榎は全て見抜いていた訳ではない。序盤から各色の公九牌以外を満遍なく切っていた竜の手牌がかなり怪しいと感じていたがそこには絶対の余裕があった。序盤に早くも〔二〕の槓子を手牌に揃えたことで国士の目を100%潰しタンピン三色の誘惑を天性の直観で断ち切り竜の和了を封殺していたのだ。

「哭きの竜なんてけつたいな異名はコケ脅しやないやろなあ？ はよ哭きい……アンタの本領はそないな国士なんかやない。アンタの哭きを直に見とって体が疼きよるわ」

不聴罰符の点棒を手中に収めながら洋榎は挑発の笑みを浮かべる。

この時点で――

洋榎 37,700点

竜 23,700点

――洋榎はトップで二位の竜に14,000点のリード。

「竜、知っての通りこの雀荘はアガリのみ連荘がルールや。親の役満が1,500点になって残念やったな？」

更にアガリ連荘の取り決めで竜は貴重な親番を失う。

そして東4局、親は洋榎である。

「このまま爆速でゴールインや。立直！」

洋榎 打〔赤⑤〕

五巡目にして無慈悲な親立直宣言。下家は戦意喪失のベタオリを選択し続く対面もオリのつもりであったがツモ牌を引き入れた瞬間、その決意が吹き飛ぶ。

対面 手牌

〔横九〕

〔二二二二三四五六七八九九②〕

——き、奇跡や！ 〔②〕を切れば九蓮宝燈……しかも純正！ こんな役、聴牌したのも初めてや！

対面は悩む。親立直に振れば20,000点を切っている持ち点では飛んでしまう可能性も無くは無い。しかも洋榎の捨て牌は〔赤⑤〕以外に筒子は無く〔②〕がそもそも通るのか怪しい。

——危ないがここでダブル役満を上げればツモでもロンでもワシの逆転トップで終了や。こないな小娘共に舐められたまま負けてられるかいな。

対面は手牌の〔②〕に手を掛ける。通る自信があった。対面の視線はドラ表示牌に向けられていた。

ドラ表示牌 〔④〕

——〔赤⑤〕切り立直か……〔②〕——〔⑤〕——〔⑧〕のスジで考えればイケるか？ それにわざわざドラ、しかも赤ドラを切つとるんや。この〔②〕……通る！

「よおし、勝負や!!」

対面 打 〔②〕

「おっと、まさかそれに引っかかるとはなあ？」

「な、なに？」

「おっちゃん、それロンや」

洋榎 手牌

〔一二三12399①③⑦⑧⑨〕

「りっ……立直一発 純全帯幺九 三色同順!」

「ひっかけ立直の洋榎とはウチの事やで!」

18,000点の親ツパネ直撃により対面の点棒は1,900点に

まで減少。これによりオーラスを待たずに終了してしまう可能性が迫る。しかもこの収益により洋榎は点棒を更に高く積み上げる。

「ふふん。竜、ポンポン哭いて上がるんは邪道や、麻雀は技術の勝負や、センスと集中力がモノを言うんや。訳の分からん哭きで勝てる程、この世界は甘くはないんや！」

「ふっ……」

「竜！ 何が可笑しいんや!？」

「三味線弾きもいいが一本場だ、始めなよ」

東4局 一本場 ドラ表示牌（2）

——雑魚はこれでおとなしゆうなつた。けど、あちらさんの余裕綽々顔はムカつくわ。今に見とれや。

ここまでは洋榎の狙い通り。勝負の照準を竜に狙い始めた。

対面 打（6）

「ポン」

竜 手牌

{■■■■■■■■■■}

副露

{66横6}

「ようやく哭きかいな。せやけど今のアンタからは輝きを感じひん」

洋榎は言葉通り一切手を緩めず突き進む。今局も手牌には筒子の一気通貫が既に完成しておりその気運は衰え知らず。

次順

竜 打（西）

更に次順

竜 打（西）

字牌の雀頭落としにタンヤオや清一色の気配が濃厚の竜。しかし洋榎は果敢に攻める。

洋榎 打（5）

「ポン」

竜 手牌

〔●●●●●●〕

副露

〔5横55〕

〔66横6〕

打〔6〕

——ん、〔6〕やて？

「なんや竜さん。カンする暇なしかい」

竜が切った〔6〕 それは〔66横6〕ポンをした際に彼女の手牌の中に確かに抱えていた牌であった。暗槓や加槓のチャンスがあったにもかかわらずポンを選択した竜に疑念を抱く洋榎。竜の代名詞たる槓をしない選択が何を意味するのか……そんな思考の中のツモ番。

洋榎 手牌

〔横7〕

〔一二三四五六七八九2288〕

——竜のやつ、たぶん張つとるやろな。じゃあ何待ちや？ タンヤオか索子の清一色やろが流れのあるココで退くんわむしろ竜を利するだけ……。

洋榎はツモした〔7〕を手牌に一旦収め竜の副露と捨て牌を観察した。

——〔6〕ポンした癖に〔6〕を持ってたつてのはどういうこつちやねん。単に〔556〕とあつただけか？ そうや……そうに違いない。〔5566677〕でアガリ目無しの〔6〕ポンする必要が何処にあんねん。カンせんのは絶対調で親のウチ相手に要らぬドラを増やすことを嫌つとる証拠や。となると〔2〕——〔8〕は逆に危険や。

——勝負するならこゝは……！

洋榎 打〔7〕

読み切った……洋榎が確信を抱いて卓へ置いた牌を見て、竜の手牌が倒された。

竜 手牌

{3334477}

副露

{5横55}

{66横6}

「うぐえっ!? 清一色対々和断么九ドラ3ツ……ささっ、三倍満!?!」

一本場を加えた三倍満直撃により竜が逆転トップに浮上。そればかりか単なる点棒のやり取り、ゲームの範疇の出来事とは思えない衝撃が洋榎の胸を突き刺していた。

「こ、こっからが本番や! 愛宕洋榎の真髄は追い込まれてからなんや!」

背中に走る悪寒を振り払いながら放つ洋榎の意気込みも虚しく、南一局続く南二局も不聴流れとなる。

「あくもう! 不聴やつ!」

「……不聴」

他家二人は既に覇気は無い。打牌は弱気一辺倒になり勝負は竜と洋榎の差し勝負の様相を呈していたが、ここに来てのブレーキに洋榎のイライラはピークに達していた。

——軽い和了なんぞ今はいらんのや! 直撃や! 下手なツモじゃ対面が飛んでもうて勝てん! ここは竜からの直撃を取らなあかんのに……っ!

唇を噛み締め目に見えてイラつく洋榎。

ふと、窓の外を見れば夕焼けが暗い青に変わっていた……。

南3局 親 竜

洋榎 手牌

{横八}

{六七23467②②⑥⑦⑧}



——キタキタ！ タンピン三色！ 捨牌は分かりやすいがチャンスはチャンスや。強気や！ 強気で竜を討ち取る！

「立直！」

洋榎 打〔②〕

——高め〔8〕ならツモでも逆転、ロンでも対面以外なら和了れる！

洋榎の先制リーチを前にして他家含め竜も一先ずは回し打ちに徹したかに見えた。しかし1巡後……

竜 打〔5〕

「ロ、ロンやつ！」

三色や裏ドラは無かったものの立直も含めた和了で南三局の土壇場に点差を縮める快拳を成すも、洋榎は戸惑っていた。

「あ、アンタ、聴牌ったんか？ にしたってそこ出すかいな。見てるこっちが恥ずいわ」

ある程度に麻雀が習熟したものならば見え見えのタンピン手に生牌の〔5〕を立直者に放銃するという一見すれば初心者の打ち回し。

この失態、竜は至って平常であったという。

——気に入らん、まさか差し込みか？ んなアホな、せっかくトツプなのをわざわざ振り込むアホがどこにいるねん！

だがオーラスに向けて各々が自動卓へ牌を流し入れる作業中、洋榎は見た。竜の手牌が崩され何枚かが表になったのだ。そしてその中の一つが目に飛び込むと洋榎に電流走る。

——ぱ、〔8〕……！ それにあれば〔6〕！ ほな竜は〔8〕切りの〔47〕待ちにせんとカン〔7〕待ちの〔5〕切りしたってゆうんか？

疑念、疑惑は猜疑心となり洋榎の心を侵食す。されど無常にもオーラスが始まった。

この時の二人の点棒は——

竜 44, 100点

洋榎 35, 300点

——互いの点差は8, 800点……

太陽が沈んだ窓の外は人工的な明るさを放っていた……。空の闇夜が更に濃く、深く、重く押し掛かる……。

南四局 オーラス ドラ表示牌 (③)

七巡目——

洋榎 手牌

(横7)

(②④⑥⑥⑦⑧三三三四五六六)

再び三色の目も見える好形の一向聴。セオリーで行くならば (②) 切りが無難な選択だが洋榎の意識はまたしても竜に向けられる。

竜 手牌

(■■■■■■■■■■)

捨て牌

副露

(⑥六五⑧一二)

(横213)

(⑤)

(白白横白)

—— (②) 切り……いや、前局で三色を潰されたのは嫌な予感や。竜の手は捨て牌からしても索子の染め手や。(8)を止めて(5)を振り込んだ女や……ウチの三色の気配を察しとるかもしれない。

よしこれや！ 三色は捨てる！ 竜が索子を集めとるんなら必然処理される筒子を狙い撃ちで仕留める！

洋榎 打 (6)

次順

洋榎 手牌

(横七)

(②④⑥⑥⑦⑧三三三四五六七) 打 (7)

更に次順

洋榎 手牌

〔横八〕

〔②④⑥⑦⑧三三三四五六七〕

——ククツ……ズバリ、ズバリや！

己の読み通りのツモ運が流れ込み最速での手替わり聴牌に内心ほくそ笑む洋榎は迷いなく立直棒を卓へ投げ込んだ。

「立直!!」

打〔⑥〕

洋榎 手牌


〔三三三四五六七八②④⑥⑦⑧〕

——ドラ表示牌やろが今の竜なら打ってくる公算大や。おまけにウチお得意の引っ掛け立直！ オーラス直撃で文句なしの大勝利や！

しかし同順……

「カン」

竜 手牌

〔〕 新ドラ表示牌 〔六〕

副露

〔横213〕

〔白〕〔白〕〔横<sup>横</sup>白<sup>白</sup>〕 打〔5〕

「〔白〕カンの〔5〕切りかい竜。加積なんぞこの局面では悪手中の悪手やで。随分強気な牌やなあ」

三味線とは裏腹に洋榎は小さく舌を鳴らす。真つすぐに索子を残していればこの〔5〕でロンだったからだ。

「オーラスでバタバタするんわトーシ口の麻雀や。哭きもええがもつとどっしりと腰据えて……」

「あんた——」

「ん……？」

「——麻雀語るには早すぎる」

「な、何やてっ 言うたなくくゲツ!?!」

次順

洋榎 手牌

{横8}

{②④⑥⑦⑧三三三四五六七八}

先ほどの竜の打牌が{5}、今掴んだのは{8}。{5}—{8}待ちにしていれば……そんな遅すぎる後悔に苛まれながら洋榎は己に舞い降りていた幸運が逃げ去っていったとはつきりと分かった。しかし、それも最早手遅れ。

「~~~~ええい、ままよ!」

打 {8}

竜の鼻が小さく鳴った

彼女は哭いた副露を右手で中央に手繰り寄せると己の手牌左端の二牌をすりと倒した。

{■■■■79}

{横213}

{白}{白}

{横<sup>横</sup>白<sub>白</sub>}

「えっ、え!?!」

そして流れるような手つきで残りの手牌も無機質で滑るような手が触れる。

「小三元、ホンイツチャンタ……ドラー」

〔発発発中中79〕

〔横213〕

〔白〕〔白〕〔横<sup>横</sup>白<sup>白</sup>〕

……倍満」

「あつ、ああ~~~~つ!!」

完全に牌が倒れるや否や、悲鳴のような洋榎の絶叫が雀荘に木霊したという……。

点棒精算も行わず竜はすぐさま雀荘の出口へと行き一度も洋榎を振り返ることなく薄暗い階段へと消えていった。洋榎は決着が着いた卓上を真上から食い入るように見下ろしていた。

「な、なんで……なんで……なんでや……竜うつ」

「嬢ちゃんは惜しかったな。3局目のアガリでイけるかもってわしは思ってたんやがなあ」

「確かに、あの竜のミスで流れが変わったと思ったわ」

そんな他家の雑談が耳に入ると洋榎は心に引つかかっていた疑問が確信に変わった。

——そ……そや、南三局での不自然な索子放銃は三色手を潰すと同じ時に、オーラスでウチの打ち筋を狂わせるための布石！ も、もし無理に竜から直撃を狙わなければ……

〔三三三三四五六七八678⑥⑦⑧〕

「あはつ、ハハハ！ ウチはオーラス……ただ普通に打つとればよかったんや。ハハツ……素直に打てば、ハ、はは、勝つとったんや……」

この少女も暫くは牌を握ることすらも出来まい、卓に突つ伏すように崩れ落ちうわ言を繰り返す敗者を周囲はただ遠巻きに同情するよ

り他なかった。無理も無い。これまでも竜に挑み廃人となった雀ゴロや裏プロは数知れないのだ。

「堪忍してえなあ。幽霊退治のつもりやったのに、本物やんけ。マジモンの化け物や」

洋榎はかつて母に告げられた言葉を思い出していた。

——洋榎……雀荘に行くのは構わないけど注意はしなさい。あそこにはとんでもない連中が幽霊みたいにふらつとやってくる。私みたいなプロがとてつもない真真正正の化け物がね。

その時は口うるさい母親の小言程度にしか捉えていなかった。

「——くっ」

しかしいた。

「くっ……くっ……くっ……くっ……」

出会ってしまった。

「せ、せやけどウチも大したもんやで。ウチ……」

——竜、その魔性に……

「哭きの竜と打ったんやからのう！ あの哭きの竜と！」

愁色を醸しつつ口角を目一杯に引きつり上げ狂気すら感じさせる笑みで洋榎は竜の後を追い雀荘の外へと出た。そこには竜の影も形も無い。

「おーいみんな聞いてくれやあ!! ウチは今！ 哭きの竜と勝負したんやー！ 哭きの竜とやぞー！」

ネオンが灯る繁華街のど真ん中で、洋榎は狂ったように笑い、哭き叫んでいた。

## 鹿兒島の章

——鹿兒島県 霧島神宮——

その日、彼の地は天変地異に見舞われていた。

時刻は深夜零時を過ぎた頃……既に多くの人々が寝静まる頃合いにも関わらず神宮周辺は眩いばかりの光が降り注ぎ昼間のように明るかった。

「ひっ、姫様あ——！」

「行っちゃダメ！ 今は霞先輩に任せる他ありません！」

神宮本殿の扉は固く閉ざされており境内には巫女装束姿の少女達がこの天変地異を起こした張本人の無事を案じていた。

「姫様っ 今度はいったいどんな悪霊を降ろしたの!？」

「と、とんでもない瘴気だよっ」

仮に靈感や神性を全く持たない常人が此処にいたとしても、本殿の奥にいるソレから発せられる凄まじいまでの瘴気に当てられれば意味を解しなくとも本能でその場から逃げ去るだろう。

神代小蒔じんだいこまき

古来より天孫降臨に纏わる神々をその身に降ろす事ができる日本屈指の巫女は現在、神宮の中に居り姿を見せない。いや、見せることができないでいた。

神代小蒔を姫と呼び敬う巫女達は代々、もしもの時はその命を投げ売ってでも神代本家の血を守れと幼い頃より教育されている分家一族、六女仙である。

そんな彼女らも今は唯一本殿へと足を踏み入れた神代小蒔のよき理解者である岩戸霞いわとがすみに一縷の望みを託す他なかった。

「大丈夫です。霞さんなら、霞さんならきつと姫様をお救いになられるはずですよ！」

六女仙の一人、狩宿巴かりじゆくともえの口から出た岩戸霞の名。彼女は分家ながらも神代の血を色濃く受け継ぎ神代小蒔が万が一、とんでもないモノを降ろしてしまった時に代わりとしてその身に憑依させる能力と責務を持っていた。

既に岩戸霞が本殿の中へと出向き小一時間が過ぎていたが何ら返答は無い。ただ待つ事しかできぬ彼女らの焦燥感は積もりばかり。

その時、本殿へと通じる扉がぎいっ……と開かれ待ち望んだ霞の姿が見えた。

「霞ちゃん 姫様は!？」

同じく六女仙、うすずみはつみ薄墨初美は扉から這い出てきた岩戸霞を抱き起さず。喋ることすら苦悶の表情を浮かべる霞はまるで何日も飲まず食わずで監禁されていたかのように憔悴しきっていた。

「ごめんなさい。私ではとても……被い……き……れ——」

体力の限界を迎えたのか事切れるように意識を失った霞。それを目の当たりにした薄墨達は最早どうする事も出来ず呆然と立ち尽くす他なかった。

「これでは当分学校には行けませんね……」

六女仙であり戒能良子の従姉妹でもある滝見春はたきみはるそんな不安をつい漏らす。しかしそれが気を紛らわす方便なのは皆、分かっていた。

——そもそも、この場を生きて帰れるのか？ 永水女子の面々はその不安を口に出すことを寸前で留めていた。

「わ、私が行くよー」

薄墨初美はこの時、死を覚悟していた。仕えるべき主であり友でもある神代小蒔を救う為……他の六女仙をこれ以上危険な目に合わせぬ為……少女は現世の未練を断ち切った。

しかしそれは他の六女仙も同じである。

「私達は姫様をお守りする六女仙です。どんな時も一緒です」

「もしも姫様をお救いするのに贅が必要とあらば喜んでこの身を捧げます」

「み、みんなー!」

初美は皆の献身が悲しい程に嬉しかった。傍から見れば時代錯誤



の封建主義かもしれない。しかし六女仙にとっては神代小蒔は命を懸けるに値する姫なのだ。

「ありがとう。皆の命、私に頂戴ですよー」

本殿へと向かう少女達、それは死出の旅路さながらの歩みであった。

しかしその最中、石段を上る音が境内に響いた。

「不味いですねー。こんな時間に参拝者ですかー？」

後に、薄墨初音は六女仙達に語る。

コツ、コツ、と石段を昇る音は死を覚悟した私の心を何故か揺らし続けた……。

まるで姫様と初めて出会った時のような、神や仏との対面に近い情動を私は感じた……。

石段を昇り境内に現れた女は動揺する六女仙達を通り過ぎ本殿へと続く石畳を進んでいく。

「行ってはいけません！」

「霞ちゃん!! 今は休んでなきや駄目ですよー!!」

「どこのどなたかは存じ上げませんがそこに足を踏み入れれば命はありません! その中に御わす方は人知を超越した魍魎! 人間などひとたまりもなく魅入られとり殺されます!」

女は霞の必死の訴えを背中で受け止めつつも歩みを止めない。まるで恐怖など感じぬかのように……。

「は、入っていききましたね」

「正気の沙汰じゃない。自殺と同じです！」

「ど、どうしよう霞ちゃん！ 緊急事態が更に異常事態ですよー！」

「だ、駄目よっ！ 勝てない！ どんな人間でも、勝てるわけがない。もしもアレに勝てる者がいるならばそれは……」

「そ、それはー？」

「……人間、じゃないわ」

歴史を感じされる木組みの巨大な社の本殿に入ると、場違いと言える全自動麻雀卓が中央に鎮座していた。

そしてその麻雀卓には一人の少女が鎮座していた。

六女仙と同じく巫女姿の少女であるが纏う空気はまるで別物。

「ひ、姫様……」

後を追ってきた薄墨達も主の変わり果てた姿にショックを受けていた。高貴な存在として生まれた時からその呼び名の通り姫として扱われてきた神代小蒔だが薄墨達は決して彼女の血統のみに仕えてきている訳ではない。

血統を笠に着ず誰にでも笑顔と優しさを見せる木漏れ日のような温かい人柄に皆が惹かれているからこそ、この人に人生を捧げようと思っていたのだ。

それが今や神代小蒔は神々しい威光は禍々しい邪気に移り、朗らかな顔は能面のような冷たく無機質なモノへと変質していた。

「最早アレは姫様ではありません」

「霞ちゃん！ いったい姫様には何が取り憑いているの!？」

霞はその問いの答えを震える声で恐る恐る唇から絞り出す。

「あれは……天津甕星アマツミカボシと呼ばれる神です」

アマツミカボシ

西洋神話に比較的に見られる善悪二元論とは異なる多神教神話である古事記・日本書紀にて悪神として明記され、日本神話屈指の軍神であるタケミカヅチすら撥ね退けた武力を有する異例の神である。

西洋では大悪魔ルシファーの象徴でもある明星、金星を現す星神でもあり太陽神天照大御神の権能にすら逆らおうとする存在。

それが今、天孫降臨神話発祥の地の一つとされるこの霧島神宮に舞い降りているだ。

神代小蒔の中に降りた存在に六女仙達が衝撃を受けた時、外へと通ずる扉が独りでに大きな音を立てながら閉まった。それはまるで逃げ道を封じるかのように。

「唯一の扉が閉ざされました。もう我々は逃げられません」

霞からすれば絶望を意味するその事実だったが女はさして気にも留めず誰も近付きもしない雀卓に座った。座席は神代の対面へと。

「なっ、なんて恐れ多い！ 今すぐそこから離れ——!？」

「ひゃあっ!？」

謎の女が席に着くと同時に霞と初音の体が見えない手に引かれるかのように雀卓へと誘われ、神代から見て上家・下家に霞・初音が着席させられる。

「私達に麻雀をしろと……?？」

「あわっ あわあわ……や、やるしかないですよー」

唐突に始まった前代未聞の麻雀。

見知らぬ乱入者に悪神に憑りつかれた巫女と言うイレギュラーに對して霞の腹は決まっていた。

——なんと少しでも姫様を救う。その為なら私を含めた他の面子は生贄にしても……

親友である初音や同志達である六女仙を横目にしながら霞は冷徹な覚悟を下していた。そしてこの時、霞達は突然現れた陰気な女を豹変した神代小蒔の事もあり偶然にも巻き込まれた不幸な一般人としか思っただけではなかった。

東一局 親 霞 ドラ表示牌（一）

外界の明かりすら差し込まぬ閉ざされた本殿内は昔ながらの蠟燭によるぼんやりとした光のみがユラユラと揺れていた。それは彼女達の命を現すかのようであった。

古事記日本書紀の神ながら全自動麻雀卓の稼働に全く動じず小蒔は出来上がった山から流れるような手付きで手牌を作る。その動作一つ一つに神威が宿るかの如く荘厳かつ流麗である。

初美 配牌

（一二三四二三四②③④南北）

——うっ、この配牌は喜んでいいのでしょうか？

霞 配牌

（123456789東東西北）

——不吉ですね……

霞達はこみ上げる吐き気と悪寒、そして出来上がった配牌の良さに言い知れぬ不穏を抱き胃を掴まれる思いであった。

兩名とも一向聴、最低でも満貫が見える好配牌を前にしても警戒心ばかりが膨れ上がる。

異常な冷気に支配されながらいよいよ生死を懸けた戦いが始まる……少なくとも霞達はそう思っていた。

パタリ……と、おもむろに陰気な女が手牌を倒した。

その手牌に霞は思わず二度見し初音の喉はひゅつと鳴る。

陰気な女 手牌

（二九19①⑨東南西北白発中8）

「うっ 国士無双！ ……じゃ、ない!？」

「え、これって……!?」

「九種九牌」

陰気な女の抑揚のないこれまた底冷えするような宣言と共に東一局目は出鼻から流れとなる。

「嘘……〔8〕切りで国士十三面待ちなのに！」

霞の疑問は最もである。取り決め次第では十三面待ちのダブル役満もあり得た超絶なる好配牌をまさかの蹴り。誰もが愚かな選択だと怪訝な面持ちとなった。

だが霞達は知らない。

この時、神代小蒔の手牌は……

〔5558白白発発発中中中〕

もしも女が国士無双に拘っていれば第一打で終わっていた。

「じゃ、じゃあもう一回洗牌するよー」

更に卓中央の洗牌口に牌を入れる際、山から零れ落ちた一枚の牌が表を向く。

〔8〕

それは神代小蒔の次のツモ牌になるはずの牌である。

つまりこの局、女が九種九種を選択していなければ国士を追おうとも諦めようとも役満を振り込むかツモ和了られていた。開幕から張り巡らされた人和、地和、大三元、四暗刻の四つの役満成就の可能性を回避した神憑りの判断。

「名……」

ただ一音、その一音だけで水を打ったように本殿内が静まり返った。

——姫様が口を開いた!? これまで私達とすら一切関わりを絶っていたのに!

「お前の名前を言え」  
「なんぢの名を言へ」

神代小時の口から発せられた古風なそれは問いであって問いでない。見えない刃の如く女の首筋に突き付けられた絶対者の命令に、女は震え一つない抑揚ではつきりと答える。

「……竜」

「竜!? まさかあの!」

「知ってるの? 霞ちゃん」

「思い出しました! 全国大会個人戦優勝の甲斐学園代表選手!」

「ええーっ!? 何でここにいらっしゃるんですかーっ!」

「とても面白く途中で終わるのはつまらない。飛び終りは認めない。」

神代は嗤った。本来の神代小時では到底見せれない獲物を前にした残忍な肉食獣の笑み……霞達の肝を一瞬で潰すその悪意を一身に受ける竜もまた――

「ふっ――いいだろう」

――微かに笑ったと言う……。

東一局 一本場 親 霞 ドラ表示牌〔發〕

仕切り直しとなり改めて気を引き締める霞と初美。序盤であろうとも甘い打牌は消してせぬよう慎重に神代の手配を予測する。

――捨て牌は索子と字牌……〔赤5〕も捨ててますし索子は取り敢えず大丈夫そうですよ――

初美 打〔4〕  
「栄」

それは唐突に告げられた。

「へ……?」

神代 手牌

〔一二三三四四2344②③④〕

「満貫」

「へううっ?!」

初美、痛恨の満貫振り込み。

通常の麻雀ならば運が悪かったで済まされる振り込みだがこの対局では意味合いは大きく変わる。初美からの点棒を受け取るその表情は、先ほど竜に対して見せた好奇心の欠片も感じさせない無機質なものであった……。

東二局 親 神代 ドラ表示牌〔②〕

誰もが警戒する神代の親番。直前に振り込んだ初美は勿論の事、霞や後ろで対局を見守る六女仙達もぎゅっと身を引き締めた。しかし……

「立直」

神代 打〔横5〕

「えーっ!?!」

「ダブル……ですか」

無情なるダブル立直に霞達は恐れ戦きながらも幸運にも配牌にあつた〔5〕を揃つてを切り出す。

「自摸」

神代 手配

〔五六七七八九234⑨⑨⑨北〕〔北〕

ドラ表示牌〔西〕

〔■〕

ドラ表示牌〔西〕

〔⑧〕

「跳満」

「う、裏ドラがー!？」

東二局一本場 親 神代

竜 副露

〔横北北北〕

——竜さんが泣きましたか。しかしドラでも風でもない〔北〕ポン……と言うことは染め手ですか？

援護の為に捨て牌にない索子を連打する霞だが竜は目もくれない。そして三巡後、

〔立直〕

神代 打 〔横9〕

またもや神代の先制リーチが宣言される。二度目の親リー。場の誰もが固唾を呑む。

〔カン〕

竜以外は。

竜 副露

〔横北北〕 〔北北〕

〔ツモ〕

竜 手牌

{234555567} ② { } ② { }

副露

〔横北北〕 〔北北〕

——速い！

神代の連荘と言う悪夢に苛まれかけていた霞達を救うツモ。僅か六巡目での出来事に霞は舌を巻いた。

——〔②〕を切って染め手に移行すればドラとの絡みも期待出来るし〔5〕の槓材も哭いて槓ドラを乗せられれば前局の失点を取り戻し



御釣りも期待できそうなもの。

しかも姫様の親リーが宣言されたあの状況で槓ドラを増やす危険を犯した上でなんの迷いもない加カン！ からの嶺上開花！ なんて判断！

「さ<sup>そ</sup>うだ、それ<sup>それ</sup>にて<sup>いい</sup>ありぬべし<sup>もつ</sup>。なほ<sup>と</sup>足<sup>足</sup>搔<sup>搔</sup>け<sup>よ</sup>、竜<sup>竜</sup>」

「——ふ」

竜、僅かな点棒を得て神代の親を蹴る。しかしその目はただ虚空を見つめていた……。

東三局 親 初美 ドラ表示牌 ②

「立直」

神代 打〔横白〕

「またも立直宣言。その勢いに微塵も陰りがない。」

「自摸、満貫」

神代 手牌

〔一一九九1199東東南南北〕 〔北〕

「づつ 〔北〕単騎っ!?!」

〔北〕は既に二枚場に見えていた。更に言えば他の対子のポン材も多く切られており哭く選択肢もあったのに地獄待ちの七対子を選択。直前に切った〔白〕は生牌で上がる確率は〔北〕よりずっと良かったのにも関わらずにだ。

ヒヤリ——ヒヤリ——と霞たちの心臓に凍えるような冷気が差し込んでいた。

東四局 親 竜

「ポン」

初美 副露

〔横東東東〕

〔北北横北〕

二度目の哭声、この哭きにより場が一気に沸騰し霞もその意図を汲む。

——初美ちゃんが鬼門を哭いた！ なら既に他の字牌も手牌に……

薄墨初美の特筆すべき能力、それは北家時に〔東北〕の鬼門を哭き続けざまに〔南西〕を揃えて上がる確定の役満和了である。この常ならぬ能力により初美は九州地方屈指の得点力を誇る雀士として恐れられている。

これが通常の麻雀ならば警戒必死の場面ではあるが霞にとっては貴重な援護射撃となっている。今回の麻雀は霞達の順位や点差よりも神代小時を倒す、つまり彼女に憑りついている神に一位を取らせないことが重要である。接待麻雀で満足して高天原に帰ってくれるのならば簡単だがそのような楽観的な展望を抱ける相手ではない。

——なんとか初美ちゃんを援護できれば……！

〔立直〕

神代 打〔横7〕

霞達の希望を砕く神代の残酷な立直宣言。東四局目にして本来ありえない程の緊張感が噴出する。

——嫌な立直ですね。でもこの手牌なら……

初美 手牌

〔白南南南西西西〕

副露

〔横東東東〕

〔北北横北〕

初美は既に張っていた。しかも大四喜・字一色の〔白〕単騎待ち。ダブル役満のチャンスは彼女の中でオリの選択肢を封印した。

——一発、来てください！

普段の彼女ならまず間違いないくツモる流れである。

「うう……」

初美 打〔1〕

そうそう都合よくはいかない。これまでが出来過ぎていたのだ。それにまだ局は中盤に入った頃、ツモ和了も出和了も一対三の色合いが強い今回の麻雀ではチャンスはいくらでもある。

そう思っていたのも束の間、戦慄が走る。

「栄<sup>ロン</sup>」

神代 手牌

〔1333456②③④七八九〕

初美は一発に振り込んだことよりもまず相手の手牌に役もドラも無いことに安堵した。

——た、助かりましたよー。立直一発だけならまだ……

胸をなでおろし点棒を渡す準備に入った初美を他所に神代はおもむろにドラ表示牌へと手を伸ばす。

ドラ表示牌 〔發〕

〔■〕

正確にはその下にある裏ドラ表示牌を。

ドラ表示牌 〔發〕

〔2〕

「満貫」

「ひゃあつ またあ——!?!」

初美のはだけた巫女装束が更に乱れ一部ははじけ飛んだ。ここが衆目の場ならかなり問題のある光景だがいまはその様なことも些細なことと言える。

霞は裏ドラが三つ乗った事よりも神代の〔7〕切りに衝撃を受けていた。

「五面待ちを捨てて〔7〕切りの〔1〕待ち……!?!」

——〔7〕を手牌に残し〔1〕を切れば平和も付き上がりの確率も跳ね上がる。更に言えばもう少し手牌を育てればタンヤオや一気通貫も見えたにも関わらずほぼノータイムでの〔7〕切り立直!?!

偶然の幸運と片付けるには余りにも気味が悪く、洒落になっていなかった。

南一局 親 霞 ドラ表示牌〔②〕

散々な状況ながら幸いにも霞の手牌は何故か好調。7巡目にしてキー牌を引き入れこの形。

霞手牌

〔横7〕

〔四五六六七⑥⑦⑧2346白〕 打〔白〕

三色も見える平和一向聴。更に初美も霞の〔白〕切りを見て仕掛ける。

「ポン！」

初美 手牌

〔②③③⑤⑥⑦⑧⑨發發〕

副露

〔白横白白〕

前局での満貫直撃に精神をかなり疲弊させた初美だが彼女の本質は負けず嫌いのチャレンジャーである。一度や二度の振り込みで臆する軟な精神を持つてはいない。

九巡目 竜 打〔④〕

「チ……」

〔ポン〕

竜の捨て牌に待つてましたと鳴き宣言をしようとした初美を神代の声が遮る。

神代 手牌

〔〕

副露

〔④横④④〕 打〔③〕

強気なドラ切りに初美も更にギアを上げ食って掛かる。

「ポン！」

初美 手牌

〔②⑤⑥⑦⑧⑨發發〕

副露

〔③③横③〕

〔白横白白〕

その執念が実る。〔②〕切りで跳満確定の聴牌、当然〔②〕を手牌から切り出す。

打 〔②〕

「栄」

「……へ？」

神代 手牌

〔一一三三七七②②中中中〕

副露

〔④横④④〕

「へう？」

「〔中〕のみ……!? そんな！」

南二局 親 神代 ドラ表示牌 〔⑥〕

またも再び恐れていた神代の親。霞達の考えはとうに決まっている。ただでさえ人智を超越した存在、神が憑依している状態の神代小蒔の異常性は分かりきったこと。それも親番となれば無駄な色気で手役を作るのは自殺行為も甚だしい愚行。

相手が何であれ、どれだけ自分達が傷つこうとも、彼女らは諦める事は無い。

しかし神との対局は確実に彼女らの精神を削いでいった。

霞 手牌

〔二五七二八①⑨⑨東南西北北〕





らばなにも〔4〕ではなく〔1〕か〔9〕切りで通れ二順三順と安全が買えた。

けど、竜が〔9〕カンをして引き入れた嶺上牌は——  
竜 手牌

〔横中〕

〔六〕111235678

副露

〔●99●〕

——嶺上牌は〔中〕だった！ 〔六中〕はどちらも生牌、でもこの状況で〔中〕を切るか普通!!

だが巴はその時見てしまった。洗牌で崩れた山……初美が次に自摸る牌の正体を……！

〔中〕

——うっ!? ちっ 〔中〕!!

巴は独り恐怖した。神代ではなく竜、その心眼に。

——竜が振り込んでいなければハツちゃんが〔中〕をツモ切って大三元に振り込んでいた！

で、でもっ！ それがどうして分かるの!!

勿論それは非常に薄い確率である。たとえその可能性があったにせよ神代の手牌やツモ牌、更に嶺上牌までも予想しなければ手痛い振り込みを犯す意味など無い。

「——ふっ」

点棒を渡した竜は静かに、しかし確実に笑みを零した。牌は見えども巴にはどれだけ考えても竜の真意は見えてこなかった。

南二局 一本場 親 神代

霞 手牌

〔一一一二三三三五六七八九9北〕





〔四五五六②③④⑤⑦⑦〕

次順〔4〕か〔6〕引きの〔2〕切りで跳満聴牌も見える好形の一向聴が完成。

更に直後、霞も聴牌。

霞 手牌

〔横中〕

〔①②③⑧⑨③④⑤⑥⑧八中中〕

ドラの〔7〕で3, 900だが神代も聴牌していないとはとても言えないプレッシャーの中、霞は――

打〔2〕

後ろで見ていた六女仙達が息を飲んだ。この局面で親でもない霞が安手を上げる意味はほぼ無いがそれでもせっかくできた聴牌を高めに作り変えるでもなくただ崩す行為に愕然とした。

困惑する彼女達をよそに場は急激に進行する。

「ポン！」

初美 手牌

〔四五六③④④⑤⑦⑦〕

副露

〔②横②②〕

打〔4〕

初美、聴牌とは言え跳満を捨て1, 500のみのクズ手に変更。これにより霞は聴牌を失い一見すると二人の聴牌と一向聴が入れ替わっただけに思えるが実際は違う。

「そうか！ 流石は霞さん達だ！」

「どういうこと？」

「この局は貰いました！ 霞さんの和了り牌を初美さんは持っていませんがその逆は違います」

「ああつ そうか！ 初美さんが〔2〕ポンで聴牌すれば霞さんが〔4〕を差し込める！」

「しかも姫様に一切ツモらせない手出し不可能のアガリ一直線！」

沸き立つ六女仙の歓声を背に霞は最後のピースである牌を卓へと繰り出した

「これで！」

霞 打〔4〕

「ロ——」

「栄」

抜群のコンビプレーで生み出した勝利に万感の思いで手牌に手を掛けた初美の口からアガリ宣言が出るその時、またも神代の冷たい声が割って入った。

「な!!」

「え……!!」

神代 手牌

〔一二三三四四⑧⑧56777〕

「断么九一盃口ドラドラ、満貫」

「きやあああつ!!」

「へううううう!!」

満貫一閃。

完璧と思えた連係プレーは神代の頭ハネ、それも非常に手痛い反撃でもって水泡に帰した……だけではない。

観戦する六女仙達も初美も霞も、この異様さに心底震えた。通常ならばありえないこのアガリに。

——ありえない……! 今の和了もさっきの初美ちゃんの振り込みも普通なら絶対にロンなんてできないわ!

霞と初美は混乱と恐怖の渦に吞まれていた。今までの和了はまだ不用意な打ち込みや神代の強運でなんとか納得できるが南一局と南三局の二局の和了は全くの別問題……否、別次元と言えた。

——南一局目の初美ちゃんが姫様に振り込む前に彼女は〔④〕をポンしてドラの〔③〕を切った。つまりポンする前の手牌はこう。

神代 手牌

「一二三三七七②②③④④東東東」

——一盃口〔東〕ドラドラの満貫。ドラ待ちのダママンを崩して〔東〕のみの1, 300にしたばかりか竜さんが捨てた〔④〕を哭いてドラ〔③〕切り！そしてそのドラ〔③〕をポンして浮いた初美ちゃん〔②〕でロン！

——わ、私の手牌が一向聴で〔②③③〕の形になっていると分かっていたいなければならない芸当だよー。

これだけでも驚嘆すべき事実だが更に霞達の思考は深まる。

——それに加えて今局の私の振り込み。初美ちゃんとのコンビ打ちにはほぼ完ぺきだったはず。私の〔②〕切りで初美ちゃんは②ポン聴牌〔45〕待ち。次順で私が手牌の〔4〕を差し込んで終了だったところを頭ハネの満貫。

——姫様はそれまでツモ番なしで打つ手なしのはずです。つまり私達が仕掛ける以前から既に姫様は聴牌待機と言うことですよー……！

青ざめる、などと言う次元はどうに超えていた。

「神……！」

誰と言わず畏怖の声が漏れた。

読み……当て勘……計算……それらの言葉が虚しくなる圧倒的力。

神の力を借る霞達をあざ笑うかのようにその更に頂上の位置に座す神代の威光。いつそイカサマをしていると言われた方が霞達は気が楽である。だがそんな事実はない。ここにいるのは間違いなく神そのものなのだから。

「竜さん。私たち二人が援護しますので安心してください。きっと勝てます」

竜の連荘を促す霞の露骨な提案に狩宿は沈痛な面持ちを更に悲壯とさせた。

——無理だ。竜さんの親番とは言え互いの差は約80000点。

今の姫様相手では例え三人がかりであつても勝てる気がしない。ましてやこの大差を埋めるほどの連荘など不可能だ。しかもこの一局で彼女が逆転勝利するには姫様からの役満直撃が条件ながらも今の姫様が振り込む可能性は皆無！ となると勝ち筋は事実上ダブル役満以上のツモしかないという無茶苦茶！

確率の高いダブル役満は四暗刻単騎待ちだけど今回の麻雀のハウスルールでは純粋な役満複合しか認められていない。つまり四暗刻単騎待ちや国士十三面待ち等のダブル役満はただの役満でしかない！

それでも

それでも彼女なら

あの哭きの竜ならば勝てるかもしれない。

そう願わずにはいられなかった。

そしてこうも思った。

この対局から決して、決して目を離してはいけない、と。

オーラス 親 竜 ドラ表示牌〔九〕

竜 打〔②〕

——竜さんの第一打目は平凡な捨て牌。通常の麻雀なら気にも留めない一打ですが今回それは通用しない。

〔槓<sup>カン</sup>〕

神代 副露

〔■発発■〕

——純粹役満の複合を目指さなければいけない縛りを知つてか姫様は一巡目にしていきなりの〔發〕暗槓。これで大三元・四槓子・緑一色が一気に消え、私の喉は引き攣り冷や汗も凍るようだった。

〔槓<sup>カン</sup>〕

〔■①①■〕

〔■発発■〕



「カン」

——えっ 閃光った……!?

私はその光景を今でも鮮明に覚えている。

竜さんが槓した（東）は雷の如き閃光を放ちながら卓上を滑る様に流れて行きました。その光景を見た誰もが、姫様に憑依していた神すらもそれに見入っていたのです。

竜 副露

{⑥⑥横⑥⑥}

{横二二三}

「あ、あああああ！ 霞ちゃん！ ど、ドラが!?!」

驚愕の声を上げる初美先輩に促され皆の視線がドラ表示牌に注がれた。するとそこには更なる衝撃の現実が暗夜の中から顔を出し光に照らされていた。

ドラ表示牌（九一二⑤）

「ば、馬鹿な！ なぜ私を恐れない!! を、をこなる！ 何故我を恐れず!!」

「オレに恐れなど無い。あるのはただ」

その時私は分かってしまいました。竜さんは神に、いえ……

「勝利への執念……だ!」

哭きの竜は……神を超えた!!!

「ツモ」

竜 手牌

{二二二二三三中} {中}

ドラ表示牌（九一二⑤）

副露

{⑥⑥横⑥⑥}

{横二二三}

不思議な光景でした。竜さんの勝利を祝うでもなく、姫様の無事を

願う訳でもなく、神にお仕えする私たち全員が卓上に出現した神々しさに見惚れてしまっていたのです。

青天の霹靂でした。一局で逆転するにはダブル役満以外ありえないと誰もが思っていた中で、この方は大明槓の責任払いによる役満ツモで決着をつけてしまった。

それも〔中〕以外はすべてドラ。和了役は嶺上開花しかないという奇跡を超えた奇跡によって！

「うつ……りゅつ……竜ウウウウ！」

「姫様?！」

こひゅう……！

屈辱に歪み今にも襲い掛かりそうだった姫様の口元から蒼白く輝くモノが漏れ出ていました。それ自体にも驚きましたがまるで魂のようなそれが竜さんの身体へと吸い込まれていく様に私は目を疑いました。

自然と私の手がその中心へと伸びていた。

——触りたい……！

何故かその思いに駆られた私の手がその青白い肌へと触れるその瞬間、

バチイイイ!!!

一瞬、彼女の肌との間で閃光が弾けた。

落雷に撃たれたような感覚だが痛みは無かった。

——さ、触れない!?

その閃光はまるで竜さんに触れるのを拒むように私たちの間に不可視の壁を作っているかのようにだった！

——こ、この人は！

私は遂に悟った。眼前にいる存在の本質、本領、本域……その真を!!

——生者でも、死者でもない！ 穢土の地に立っていないがらっ!!



この方の魂は黄泉そのもの!!!

愕然の最中、ソレが初めて振り返りその目が私を初めて捉えた。

「かはっ——!?!」

私の心臓を震わす衝撃。氷の剣で心臓を穿かれたような感覚を感じる頃には意識は空に溶け消えていた。

私が目を覚ますと、悪神は消え去り空は既に本物の太陽が輝いていた。

あの方もまた、何処かに消え去ってしまった。

## 復活の章

季節は過ぎる……

時代は廻る……

運命が辿る先に……少女が立つ。

——インターハイ 東東京個人戦予選会場——

都心のアスファルトすら焼き溶かす夏の太陽の下に、全国への切符を求め熱き想いを滾らせ集った少女たちがいた。

個人戦は参加人数が団体戦よりも遥かに多くその熱意も負けてはいない。

彼女らの雄姿を見ようと観客やマスメディアが会場内にごった返す中で、一際大きなうねりが起こった。そこに肩で風を切り勝者の威風を吹かせて歩く少女達の集団が現れる。

人混みは自然と左右に割れ歓声上がる。

「臨海女子だ！」

「団体戦に続いて留学生達の活躍が見れるぞ！」

「個人戦王者奪還なるか!？」

昨年度の東東京予選大会優勝校で今年度も圧倒的な強さでインターハイ出場を決めた臨海女子の登場に野次馬は色めき立ちライバル校たちは気圧される中、同校二年生のメガン・ダヴァンは隣を歩く友人の様子を窺っていた。

「智葉、何か心配ごとデスカ？」

メガンの友人にして同級生の辻つじ外内智葉いとさとほは居並ぶ衆目をつぶさに観察しておりまるで誰かを探しているようである。

「出場校の名簿を見たか？ 甲斐学園の名がある。昨年にかけて個人戦のみのエントリーだ」

「ハイ知ってます。でも彼女が来るのかは分かりませンヨ？ あんな事件にあった訳デス」

「それでもだ。私はこの一年間ずっと……彼女を倒すことを目標に麻雀を打ってきたんだ」

「……それは私も同じデス。ある意味で彼女のおかげで私達はもっと強くなりまシタ」

辻外内は昨年の団体戦には出場してはいなかった。臨海女子が常勝と言われる所以は同校の麻雀留学生をフルに投入した多国籍チーム。そこに当時一年生の智葉が入る枠は無かった。

東東京で最強の臨海。しかし留学生たちが活躍すればするほどいつしか臨海は助っ人外国人頼みの中身のないチームだと揶揄する声も上がっていた。

そこに彼女は敢えて足を踏み入れた。目的は唯一つ、強者との切磋琢磨によるさらなる高みへと至る為。

人数が限られる団体戦にいきなり出られるとは彼女自身も思っていなかった。ならばと出場した個人戦、その進撃を止めるものは同校の同輩や先達たちでもできず一年生ながらにして決勝まで勝ち進むことができた。

——団体戦は三年生の先輩たちにとっても最後の花、ならば私は個人戦で全国の切符を掴む！

そのような決意を秘めて臨んだ決勝戦……一人の少女がフラリと現れ全てをブチ壊した。

——竜——

麻雀大会ではほとんど無名の甲斐学園。そこに所属するこれまた無名の陰気な少女……当初はその特異な雰囲気注目が集まったが誰もその実力に気づきはしなかった。

だが異変はすぐに起こった。

一人、また一人と全国レベルの雀士達がある者は悲鳴を上げ倒れ、ある者はケラケラと笑い出し気を狂わせた。竜など眼中になかった他校選手達対局後に全ての活力を奪われたかのような無惨な風体で対局室から這い出てきた光景に、ようやく彼女らは自身の愚かさに気づいたのだ。

南四局オーラス、智葉の点棒は僅かだが竜を上回っていた。全国への切符に彼女の手は届きかけていた。

「あんだ、背中が煤けてるぜ」

耳にこびり付く言葉。目に焼き付く倒された手牌。心に突き刺さった敗北の二文字。

再戦を誓った。勝利を夢見た。雪辱を果たす機会を待ち続けた。

しかし其処に飛びこんできたのは竜の狙撃事件。続いて安否不明。その凶報を聞いた智葉は、暫し絶句したと言う……。

失意のまま今年の団体戦のメンバーからも漏れた彼女は僅かな希望を胸にこの個人戦に出場していた。

「私は竜と対戦は出来ませんでシタ。ですがもし彼女が出場しても今の智葉なら勝てる」と臨海の皆が知ってマス」

「ふ、ありがとうメグ。団体戦は順当に全国へ出場できたことだし個人戦も私たち臨海女子が貰……お……」

「智葉？」

会場内に入った智葉は突如、立ち尽くした。その視線の先には個人戦対戦表が表示されたモニターに釘付けとなっていたからだ。

「竜……」

彼女は一年間思い続けてきた少女の名を見ただけで胸が張り裂けそうだった。誰も居なければ涙も流したいほどだった。

——個人戦試合会場——

大会規定により予選の区分けによって智葉たち臨海女子と竜の甲斐学園の対戦は本選まで無い。しかし卓へと着いた智葉だったがその心中は穏やかではなかった。対戦相手は失礼な話だが敵ではない。彼女は勿論の事、会場誰もが一席だけ空席となっている卓をずっと凝

視していたのだ。

「なにいい〜！ 竜選手がいないだあ〜〜〜！！ ちゃんと探したのかあ！！」

「と、当然です！ 控室も会場前も限なく！」

「どうすんだよ！ もう対局が始まっちゃうぞっ！」

大会関係者達の怒号入り混じるやり取りに智葉の心は沈んでいた。

「審判、なんとか試合開始時間を延ばせませんか？」

「それは出来ません。災害や機材トラブルのような余程の不可抗力でない限り試合開始時刻に対局室にいない選手は大会規定に則り失格となっております」

「そ、そこをなんとかっ。竜選手がいないんじゃ観客は納得しませんよ」

「甲斐学園さんもなんとか言っちゃって下さい！ ね！ ねえ？」

尚も審判団に食い下がるマスコミやスポンサーは夜叉のような大男に話を振る。甲斐学園学園長 石川喬は多くの視線を集めながら平然と笑みを浮かべていた。

「ご迷惑をお掛けしてすみませんが、何も心配することはおまへん。竜は来ます。必ず来ます！」

石川の顔には自信が満ちていた。

「あ、竜選手から何か連絡でもあったんですか？」

「くっ……くっ……くっ。言葉など必要やあれへん。わしには分る。

竜は来るんじや。必ず来るんじや〜〜！」

だが石川の咆哮も空しく時間は刻々と過ぎていく。扉はまだ開かない。

「竜選手！ 甲斐学園の竜選手はいませんか！ 試合開始までに着席していないと失格になりますよ！」

係員の呼び出しが会場内に無情に響く。

智葉は諦観にも似た絶望を味わっていた。

——やはり、竜は来ないのか？ 私は、私はこんなにもお前を想って牌を握り続けてきたと言うのに……！

カチ、カチ、と会場に設置してある時計が試合開始時刻に迫る。係員はインカムからの指示を仰いだうえでもう一度会場内を見渡し竜の名を呼ぶ。

「竜選手！ いませんかー！ あと一分で失格ですよ！」

だが来ない。会場外へと続く扉は微動だにせず竜が入ってくる気配すらない。秒針が50秒を過ぎた時点で審判は裁定を下す決断をした。

「……仕方ない。甲斐学園の竜選手は大会規定に則り失格と——」

ガチャ

全員がその音の方へと首を回した。

「り……竜！」

智葉の心臓が強く拍動した。

——来てくれたのか！ 竜！ 私の為に！

竜はそこにいた。

血のような真っ赤なシャツ、無骨なズボン、視線を遮るティアドロップサングラス……そして三途の川に漂うかの如き冷気を身に纏い少女は立っていた。

「竜……！ 遅かったやないかいっ！ はよ卓に着けやあ！」

石川の怒りと喜びが混じった怒声を気にも留めず何事も無かったかのように歩みを進める竜。サングラスを外して傍の審判へ顔を見せつけると有無を言わず着席した。

「これで勢揃いや。はよ始めましょうや」

「あ、え、あつ……ぜ、全員揃いましたので、これより全国高校麻雀大会東東京地区予選個人戦を開始します！」

親である智葉は自動卓が洗牌し眼下へせり上がった配牌に目を落

とす。

「ふっ……」

彼女の自然と零れた笑みに周囲の面子は一様に不快な表情を示し、対面の三年生が口火を切る。

「あなた、今笑った？　いくら強豪の臨海とは言え舐めないでくれる」

「すみません。貴女を笑ったつもりではないんです。ただ……」

「ただ？」

〔二九一九①⑨東南西北白発中〕

「牌が……牌が光って……眩しいんだ」

——数時間後——

「智葉！　予選突破おめでトウ！」

「ありがとう。メグや他の皆も無事通過出来て良かった」

全ての対局を終え智葉は暫定一位と言う快挙で予選を締めくくりメガン達が待つ大型モニターが設置されている観客室に来ていた。

「凄い観客の人数だな」

「出場選手の優先席が無ければ私も入れませんでシタ。みんな彼女の対局が見たいようデス」

メガンの言葉通り観戦ルームは参加校の生徒たちは当然として一般客やマスコミ関係者が席に収まらず入り口の外にまで立ち見客がごった返し、中には見覚えのある麻雀プロも複数いた。

「竜はまだ対局を？」

「ハイ。彼女の卓が最後の様です。今モニターに映ってます……東三局目デス」

智葉がモニターにを見上げると竜の対局が大型モニターに移されていた。

「スコアは暫定二位か」

「対局相手は三人ともスコアがギリギリで予選通過が危ういデス。死に物狂いで打ってますヨ」

——対局室——

東三局目

下家 打 {8}

竜 手牌

{  
■  
■  
■  
■  
}

副露

{9横99}

{8横88}

{横234}

ちようど智葉がモニターに目を向けた時、竜から見て下家の打牌が河へ置かれると彼女の白磁のような青白いスラリとした手が副露牌を手牌中央に引き寄せた。

{  
■  
777  
}

{9横99}

{8横88}

{横234}

続けざまに手牌の右端から三枚を倒し下家の顔が凍り付く。他家の息を飲む音が聞こえると同時に最後に残った牌を竜はパタリと卓へ露わにした。

{9777}

{9横99}

{8横88}

{横234}

「ロン」

「よっ……四枚目の {8} で?!!」

あんぐりと口を開けたまま固まる下家を他所に竜はじつと卓を見つめていた。

東四局目 オーラス



ただのポン。

さけれど他家や智葉たち観客は竜の手が牌を手繰り寄せ卓を滑るよ  
うに流れる副露に目を奪われていた。

その姿、その光景は紛れもなく一年前に見たあの竜の姿だった。

竜 副露 捨て牌

{横七七七七} {②①⑧④⑤}

——竜は萬子の清一色か……?」

上家 手牌

{横2}

{1233345688889⑦⑧}

——よしいいぞ。索子なら必ず出てくる!

打 {⑧}

上家 次順

{横1}

{12233345688889⑦}

——索子は必ず出る!

「立直!!」

打 {横⑦}

「カン」

竜 副露 ドラ表示牌 {四6}

{横⑦⑦⑦⑦}

{横七七七七}

観戦ルーム

「ま、また哭イタ! 智葉っ 凄いデス! 智葉……?」

「……」

智葉は無言だった。

竜の哭きにとよめく観客たちとは対照的にただじっとモニターを  
凝視していた。

——綺麗だ。ああ、なんて綺麗なんだ。私は、私は彼女に勝ちたい。  
一年前にお前を失望させたことを私は心底に恥じている。

だが今回は！

今回こそお前に勝つ。お前に初めて勝つのはこの私だ。この私に決して消えない疵を刻んだお前に、今度は私が敗北と言う疵を刻んでこそ！ 一年前からこの胸に溢れ全てを狂わせる激情が報われる……！

竜！ お前は私のモノだ……!!

——対局室——






上家 打〔8〕

「ロン」






「そ、そんな！〔8〕でロン!!」

全く予想だにしない捨て牌でのロンに上家は立ち上がり激高した。だが竜の動きは淀みなく流れる。






竜 手牌

〔〕

「馬鹿な！ その〔8〕は四枚目だ！ 対々和はあり得ない！」  
下家は手牌を見渡し〔8〕が三枚あること改めて確認した。






〔〕

「すつ 捨て牌に〔5〕があるから〔58〕待ちも無いんだぞ!!」

〔〕

「カッ カン〔8〕ならたっ たっ タンヤオもつつ 付かな……い……だ……」

竜 手牌

〔〕

副露

〔〕

〔〕

「あつ、あ~~~~~~~~つ!!?」

絶叫した少女はまるで糸の切れた操り人形のように床へ崩れ落ち微動だにしなくなった。他の面子も竜の和了に呆然とし言葉を忘れた。その壮絶な光景にまるで動揺せず竜はサングラスを掛けると対

局室を後にしていった。

「決まった~~~~~！ 奇跡の復活を果たした甲斐学園の竜選手！ 昨年に続き今回も予選一位通過だあ~~~~!! 全国個人戦二連覇の序章の始まりか~~~~!!」

「~~~~こちゃん、まだ予選が終わっただけだから……」

本大会の実況アナウンサーである福与恒子は力強い声量で竜の勝利を高らかに叫んだ。言ってしまったえばまだ個人戦の予選の段階だがまるで優勝したかのようなテンションであるが観客たちはオーラスの竜の鮮やかな和了に大興奮の熱狂に包まれていた。

「~~~~でお知らせです！ 本大会は地方予選では唯一全国LIVE放送されていますがなんと先ほど視聴率が30%を超えちゃいました！ ありがとうございます！ 竜選手！」

「彼女だけのおかげじゃないと思うけどね……」

解説役の小鍛冶健夜プロのツツコミを福与はスルーしつつ実況に熱を上げていた。

「いや~しかし竜選手の闘牌はカッコいいねえ。20年前の学生時代のすこやんより凄いいんじゃない？」

「10年前だよ！ ……でも確かに彼女は強いね。プロでも勝てる人は思いつかないなあ」

「すこやんも？」

「う……答えにくいこと聞かないでよお。でもそうだなあ、私も一応プロだし頑張ればなんとか勝て——」

「それではこれより予選一位通過の竜選手にインタビューをしたと思います！ 無理だと思えますが応援して下さい！ 明日の本選もお忘れなく！ ではチャンネルはそのままです！」

「私はスルー!?」

実況席に小鍛冶プロを残し福与は竜にマイクを向けるべく走り出していった。無論、竜のコメントが取れることはなかったが、カメラの前に竜の横顔が映るその瞬間を収めようと日本全国の視聴者がテレビに噛り付いたという……。

——インターハイ 長野県個人戦予選会場——

「お、おい！ 龍門渕だ！」

「団体戦に続いて個人戦も総なめのつもりか!？」

「団体戦の大将も参加するらしいぞ！ 全国行きは確実だな……」

「何にしても恐ろしい……あんな麻雀を打つ奴と絶対に卓なんか囲みたくないな」

——龍門渕高校——

それまで六年連続で団体戦全国大会へ進んでいた名門風越女子を一年生メンバーだけで打ち破り堂々の全国出場を勝ち取った話題の高校である。

その高校が個人戦にも出場をする。予想できたことだが団体戦の暴れ振りを知るライバルたちは早くも悲愴な覚悟を抱いていた。

「フッフ！ 目立ってますわっ 目立ってますわっ 個人戦も団体戦同様目立ちまくって勝ちまくりますわ！」

「個人は上位3名だけが全国行きだから最終的にはつぶし合いになるぞ?？」

「そーそー。それに目立ちすぎると対策もされちゃうし油断は出来ないよ」

「……団体戦の対局を見るに警戒すべき相手はいるけど必要以上に恐れる必要はないよ」

会場へ向かう龍の集団に誰もが畏怖し道を開けた。彼女らを通り過ぎ、ほっと胸を撫で下ろそうとした所に更なる暴風が襲来した。

龍の集団の後方に、一頭の怪物が現れる。

130cmにも満たぬ身長に夏の日差しにも負けぬ金の髪を靡かせ、怪物は背に昼間とは思えぬ巨大な月を背負い眼光は鋭く不気味に輝き光っていた。

龍門渕高校一年 あまえころも 天江衣

麻雀を打つが為に生まれてきたような少女である。

彼女は十一の時 両親を喪った

彼女は引き取られた龍門渕家にて孤独の極みにいた。  
だから、友を欲したという。

もう一度あえて言う。

十一の夏、彼女は両親を喪った。

彼女、天江衣。

生まれついで『怪物』である。

## 愛の章

哭きの竜、復活ス！

余りにも大仰なその朗報は驚愕と歓喜を伴い光の速さで全国へ駆け巡った。

そして放送された東京地区予選での闘牌に未だ彼女の麻雀は健在であると知られることとなった。個人戦後の夕方のニュースには特集が生まれネットではお祭り状態となりいくつものスレッドが乱立していた。

全国の麻雀少女達も彼女との対戦を夢見、既に敗れた者は一部を除きその名に恐怖していた。

世間が竜の復活騒ぎに興じ明日の本選を待ち望む中、当の彼女は予選会場から帰路に着くこともせず東京の夜の街を歩いていた。懐かしさなど感じていない。ただ、歩いていた。まるで己の存在を探しているように……。

「あもう、ひよつとして甲斐学園の竜さんですか？」  
「……」

夜の帳もかき消す人工照明の雨の中、一人の少女が声を掛けた。顔が知れてからはこの手の声掛けは珍しくもない。普段ならば無視して通り過ぎる所だったが大人びた少女の憂いを孕んだ表情を見ると、何故か竜の足が止まっていた。

「やっぱり……！ 私、甲斐学園の生徒なんです。私、去年の全国大会見ました。今日の予選も」

「……」

「あの、どこに行くんですか？ 近くに家が？」

竜はじつとその少女の顔を見ていた。

「も、もしよければウチに来ませんか？ すぐそこなんです。それに私、一人暮らしなので」

なぜその少女に着いていったのか。それは竜にも分らなかった。何故かその顔を見た時に、深い懺悔と……憐憫にも似たものがふつと沸いたのだ。

「どうぞ、狭い所だけどあがって」

女子高生の住まいとは思えない殺風景なワンルームのアパートには、必要最低限の家具と生活必需品しか置かれていなかった。一目で彼女以外の同居人が存在しないと分かる。

「待っててね。今何か作るから。それともお風呂に入りますか？」

竜は無言で畳の上に座り俯いた。言葉は無かった。だが拒絶の意を示さなかった事に女は喜んでいた。

「ね、ねえ……もう真っ暗になっちゃったし、今夜は泊っていった。ねえいいでしょう？」

テレビもラジオも無い部屋の中で、竜はただ静かに——本当にただ静かに目を閉じた。

窓際に立てかけられた一輪の風車がカラ、と廻り朝日が窓から差す。

竜と少女は同じベッドの中にいた。

「ねえ、今日の本選頑張ってるね。あ、お弁当作るっか？」

何も答えず気だるげな表情でベッドから起き上がり散乱した服を着る竜の背中に少女は抱き着く。まるでその存在をしかと確かめるように。

「私、あなたの事が知りたいの。ねえ何でもいいの。なんでもいいから話してちょうだい」

女の息遣いと震える腕の温もりを背中に感じながら竜はサンングラスを掛け女の方を向く。

「……博打打ちに、女は要らない」

それだけ言い残すと女の腕を振り払い部屋を出ていく。バタリと閉まったドアをに女は縋るように項垂れる。

「待つてるから。私、ここで待つてるから」

部屋の中で少女の啾り泣くような小さな声がだた、零れ落ちた。

——個人戦会場——

「さあ始まりました！ 東京都地区個人戦本選！ 既に会場のボルテージは最高潮です！」

福与アナウンサーの熱のこもった実況に呼応するように会場内は凄まじい熱気が充満していた。個人戦本選は予選の東風戦とは違い半荘で行われる中・長期戦である。短期決戦の予選で力を出しきれなかった者も本戦では牙を剥く事になるのは明白である。

しかし今回はそれらの熱以外にも別種の熱が存在していた。

「注目はなんとと言っても甲斐学園の竜選手！ 予選で見せた麻雀を再び我々の前に見せてくれるのかくっつ!？」

最早言わずもがなである竜の存在だ。

予選を華麗な哭きと和了で一位通過した彼女の麻雀を見ようと会場内外でギャラリィがごった返し、多くの選手たちはその別次元の強さに早くも顔を青くしていた。

「他の選手もいるんだから偏った実況はしない方が……」

「昨日はインタビューする前に逃げられましたけど今日こそは優勝インタビューを皆様の前にお届けします！」

「いや、だから決めつけない方が……」

「早速本選出場を決めた各校選手たちが会場にそろい踏みです！ おおっと！ やはりと言うべきか竜選手は現れていません！ 試合開



始時間までに卓に着けば問題ありませんがそれでいいのか健全な女子高生！」

「やっぱり私はスルー!?!」

福与アナウンサーの実況の通り竜は予選と同じく試合開始ギリギリになってようやく現れ大会関係者をやきもきさせた。青少年の健全な発達と教育を目指す大会側としても竜の不真面目とも取れる態度に注意をしようとしたが彼女の鋭い眼光に睨まれると皆一様にして口を噤んでしまっているのだから仕様がなない。

「さあ個人戦本選開幕です！ 果たしてどのような激闘が見られるか——っ!?!」

「本戦は午前4回・午後6回の計10回の半荘戦だから長丁場になるね」

戦いは始まった。

大方の予想通り序盤から臨海女子の猛攻で火蓋が切られ、中でも辻垣内智葉の麻雀に場内は沸く。

二回戦

智葉 手牌

{横三}

{二四五六六12344①②③}

「リーチ」 打 {横六}

八巡目にしての先制リーチ。他家の表情が強張る中で智葉の脳裏には一抹の不安があった。

「ツモ」

智葉 手牌

{二三四五六12344①②③} {四}

「い、一発！」

「くっ！」

「三色でないだけマシかつ」

智葉は裏ドラにその不安を打ち消すかのように手を伸ばすが……

ドラ表示牌〔六〕

〔九〕

——よれたか……

智葉にはツキが無かった。思えば予選一回戦の国士無双が絶頂でありそれからは暗雲立ち込め五里霧中を彷徨うばかり。

点棒の山とは裏腹に心中は飢えていた。

四回戦

「ツモ」

智葉 手牌

〔七八九①①②②③③〕

〔④〕

副露

〔9 ■■9〕

「決まったー！ 臨海女子は留学生のみに非ずと言わんばかりのアガリ！ 強いぞ辻垣内智葉く〜！ 前半戦をトップ通過です！」

勝利を得る度に智葉は感じていた。

ドラ表示牌〔7⑧〕

己自身の器の大きさを。

——そうか……お前も竜の味方か。上等じゃないか！！

『ツキ』から見放されていくような……運がない！！

それは智葉にとって初めて味わう辛酸であった。

暗い暗い夜道の中を、一人の女が己を見てあざ笑っているように見えた。それは勿論……

「ロン」

竜 手牌

〔6789〕 対面 打〔6〕

副露

〔④横④④〕

〔横八七九〕

{横⑨⑦⑧}

「三色ドラ3」

「い、イカサマだ！　こんな立て続けに都合のいいドラやツモ牌が揃うはずがない！」

竜への振り込みによりトップからラスへと一気に転落した対面の少女は焦点の定まらぬ血走った眼で睨み声を張り上げた。周辺が騒然となる中で竜は次なる卓へと向かうため立ち上がり対面に背を向ける。

「な、なにか一言言ってみろ！　逃げる気かつ　竜！」

「背中が煤けてるぜ」

「な　な　な　なんだとくくくくつ」

更に激昂した少女にあわや乱闘かと周囲から悲鳴が漏れる。しかし竜は一度だけ振り返ると少女をまつすぐに捉え、言い放つ。

「……他人の命かまうより、己の命——磨きなよ」

「あわわっ」

今しがた激怒していた少女は去り行く竜の背中を前に怯えた子供のように腰を抜かしガタガタと震えた。

「ま、負けたあ！　な、哭きの竜くくくくつ」

人目も憚らずに大粒の涙を流し慟哭する少女は、この日を境に麻雀をやめた。

次なる修羅場へ続く通路を歩きながら竜は感じていた。

遅かれ早かれ、辻垣内智葉が自分の前に立ちはだかることを。

「遂に！　遂にこの時が来てしまいました！　本選最終局！　現在トップは臨海女子代表の辻垣内智葉選手！　それに続くは甲斐学園代表の竜選手です！」

「スコアは互いにほぼ同列で3位以下を突き放してるね。二人とも全  
国出場枠の三人には入るだろうけどそうになると気になるのは……」

小鍛冶プロの解説通りこの会場内にいる多くの観客や選手たちの  
多くはある一つの疑問を抱いていた。

どちらが強いのか？

「対局室に選手が入場してきました。まずは辻垣内智葉選手！ 基本  
に則し相手の手牌をも予測した打ちスジで攻守ともにスキの無い麻  
雀で予選・本選を勝ち進みました！」

「シンプルに麻雀が上手い子だね。よっぽど基礎練習を積まないと  
出来ない打ち方だよ」

「そして迎え撃つは竜選手！ 異端！ 異能！ 理解不能の鳴き麻雀  
で他を圧倒するアウトサイダー！ ついたあだ名は哭きの竜！ 彼  
女との対局を経て既に何人もの選手が人生を壊されたという魔性の  
女！」

「だから彼女だけ実況の毛色がおかしくない？ あの子まだ高校二年  
生だよ？」

——対局室——

竜と智葉。既にこの対局は二人の差し勝負と言っているいいもので  
あった。他家二名も自身のスコアを気にはしていたが両雄の殺気と  
も冷気とも言える雰囲気にもまれていた。

「竜、お前が対面か。ちょうどいい。お前の顔がよく見える」

智葉は依然として自身の運を見失っていた。しかし竜の前では決  
して弱気など見せるつもりは無かった。

多くの観客が見守る決戦は早くも動きだす。

「ツモ」

辻垣内 手牌

（二二三三四五六七七八⑥⑦⑧） （五）

「5200……!!」

早アガリで機先を制したはずの智葉の表情は晴れない。いや、むしろ

ろ更に険しく真一文字に口は結ばれる。

「ツモ!! マンガン!!」

次局も和了、差を更に広げた智葉。しかし直後、彼女の持つヒ首が卓上に突き刺さる――

「竜、これは何の真似だ……っ!」

――ように見えた。

実際にはヒ首など智葉は持っていない。しかし竜にはハツキリと卓上に光るヒ首の刃が見えた。

それは憤怒。

それは不審。

それは疑念。

「前局もこの局も私が捨てた牌とまったく同じ捨て牌だ!!」

智葉 捨て牌

{西⑨東三八⑧}

{横五九⑥}

竜 捨て牌

{西⑨東三八⑧}

{五九⑥}

「律儀に順番まで……っ! この勝負はお前にとって何だ! 私は全てを懸けてここにいる! それをお前はっ お前は……っ!」  
「ふっ」

「何がおかしいっ!」

竜はおもむろに自身の伏せた手牌に指を這わせ人差し指一本で左端の牌から順番に捲り上げた。

竜 手牌

{1 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■}

{1 2 3 4 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■}

四枚目の牌を捲った時点で智葉の目が見開かれる。

{1 2 3 4 5 6 7 8 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■}

「りっ 竜うゝゝゝ！」

辻垣内 手牌

〔九九九二二二三四五六七七〕 〔3〕

——実況席——

「な、なんという鬪牌でしょうか?! まるで辻垣内選手の手牌と対を成すかのように呼応する竜選手の手牌! しかし何故! 何故このような打ち方をするのか全く分かりません! 場内は騒然となっております!! すこやん、解説を!」

「……」

福与はチラリと隣の小鍛冶にヘルプを出す。如何に麻雀大会の実況を行っているプロアナウンサーであろうとも実際の現役プロ選手の解説には及ばない。しかも今回はあの哭きの竜の鬪牌である。明朗快活な実況で誤魔化してはいるものの既に対局室で何が起こっているのか彼女は皆目見当もついていなかった。

「えーと小鍛冶プロ、解説お願いしてもいいですか?」

そこにきて自分の隣にはあの小鍛冶健夜がいると自負していた。普段はフランクに接している間柄だが麻雀の実力は国内最高峰であり世界でも五本の指には入ると確信しているこの親友ならば意味不明の鬪牌にも何かしら答えを出してくれると期待して話を振った。

「こーこちゃん」

「は、はい?」

しかし……

「ちよっと黙ってて」

「へっ?! あ、はい……ごめんなさい。さ、さあ! このまま逃げ切りとなるか辻垣内選手! それとも逆転なるか竜選手! まだまだ対局は始まったばかりです!」

頼みの親友はもう福与を見てはいなかった。その横顔はもう何年も見ていない、記録映像の中にしかない最強と呼ばれた最盛期の小

鍛冶健夜そのものであった。

東三局、東四局と過ぎ……迎えた南一局

智葉も、他家も、福与も小鍛冶も観客も既に気づいていた。

「竜！ 何故哭かないっ!？」

東場を終え、未だ竜は哭いていなかった。通常ならば疑問を挟む必要もない事だがあの哭きの竜に関しては異常事態と言えた。

「……」

「私は、私には必要ないと言うのか？ 哭く価値もないとっ どうなんだ竜!？」

竜は答えない。言葉など、答えなど、端から智葉も期待していなかった。

智葉 打〔北〕

「くっ……哭け、竜」

それでも智葉は竜へ思いをぶつける。

打〔⑤〕

「哭くんだ。哭くんだよ竜っ」

怒りの表情のまま、しかしまるで懇願するように。

打〔3〕

「哭くんだよ……っ」

観客席にいたメガンは親友の姿を直視出来ずにいた。

「サトハ……っ」

余りにも、憐れ過ぎた。

「哭けえ——っ!!」

いつしか智葉の髪留めは解け、腰にまで届く長髪が怒髪冠を衝いて

いた。

されど、迎える竜は水面の如し静謐。

上家 打（一）

上家に見れば四巡目と言う序盤も序盤、しかも手牌とまったく絡まない（一）を切ることに抵抗は無かった。

それを――

その牌を――

竜は待っていたかのように――

「ポン」

――静かに、哭いた。

「竜……っ」

己を通り越し牌が哭かれる光景に智葉は痛感してた。

この女には恐怖と言うものが存在しない。

ましてや極限状態などどこにも見当たらない。

ただ一つ言えるとしたら闘い続けることを止めた時、この女は自ら死を選ぶであろう。

智葉は竜という存在に憎しみを超えた同じ人間としての愛しさを感じていた。

「――いいだろう。その喧嘩、買ってやる。この辻垣内智葉の全てを懸けて買ってやる!!」